

山梨市文化財調査報告書 第7集

堀ノ内遺跡

2004.12

山 梨 市
財団法人山梨文化財研究所

山梨市文化財調査報告書 第7集

堀ノ内遺跡

2004.12

山 梨 市
財団法人山梨文化財研究所

序

本書は、山梨県山梨市上石森に所在する堀ノ内遺跡の発掘調査報告書であります。本遺跡は本市を南北に貫流している笛吹川の支流、重川によって形成された河岸段丘上に立地しており、市内全域で行われた分布調査によって知られたものであります。この遺跡に対する発掘調査は、平成16年11月から約1ヶ月程度実施されたものであります。が、短期間での調査にも関わらず、本市では今までほとんど確認されなかった弥生時代後期の竪穴住居跡が検出され、予想以上の成果をあげることができました。

弥生時代の集落や住居跡は、本県でも確認例が比較的少なく、当該期の研究は低迷を余儀なくされていたのですが、本遺跡での弥生住居の発見は多くの点で示唆を与えるものと思われます。とくに、この住居跡は焼失家屋で、出土遺物も豊富であり、また出土遺物中石包丁が3点も検出されたことは特筆されるものであります。弥生時代の石包丁は、本県でもこれまで7遺跡で計8例しか確認されていないものですが、本例を加えることによって石包丁研究が大きく発展するものと考えられます。今回は、さらにその用途や具体的な使用方法についても正確に把握すべく、使用痕分析を行い、使用方法に関する詳細な分析とその復元ができたのですが、この成果は石包丁研究の今後に大いなる刺激を与えるものと思います。以上の諸点を含め、本調査報告書が地域のさまざまな歴史研究に資することができれば誠に幸いとするところであります。

最後になりましたが、発掘調査の準備段階から本報告書刊行にいたるまで、地元山梨市当局をはじめ関係各位、また発掘調査や整理作業に携わった多くの方々には多大なるお世話をいただきました。ここに、深甚なる感謝を申し上げ、序といたします。

2004年12月

(財)山梨文化財研究所

所長 萩原三雄

例　　言

1. 本書は、山梨県山梨市上石森715番地外に所在する、堀ノ内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、山梨市による市道石森山南線道路改良事業に先立って実施されたもので、山梨市の委託を受けた財團法人山梨文化財研究所が、発掘調査および整理作業にあたった。
3. 本書の執筆・編集は宮澤公雄が行ったが、第5章は株式会社アルカに委託した成果を掲載した。
4. 本報告書作成のための作業分担は、以下の通りである。

遺物洗浄・注記・接合	岩崎満佐子、小沢恵津子
遺物復元	岩崎満佐子、小沢恵津子、齊藤ひろみ
遺物実測・拓本	岩崎満佐子、小沢恵津子、齊藤ひろみ
遺構写真撮影	宮澤公雄
遺物写真撮影	宮澤公雄
図面修正	岩崎満佐子、宮澤公雄
遺構・遺物トレース	齊藤ひろみ、田中真紀美
図版作成	岩崎満佐子、齊藤ひろみ、田中真紀美
表作成	岩崎満佐子、齊藤ひろみ、林紀子
5. 発掘調査および整理作業において一部の調査・業務を以下の機関に委託した。

航空測量	コンピュータ・システム株式会社
石器使用痕分析・実測	考古学研究所 株式会社アルカ
6. 本書に関わる記録図面・写真・出土遺物等は、山梨市教育委員会に保管している。
7. 本遺跡の発掘調査および整理作業にあたっては、以下の諸機関・各位から多大なるご指導・ご協力を賜った。ここに記して深く感謝の意を表する次第である。

山梨市教育委員会、坂本英夫、佐々木満、中山誠二、保阪太一、保坂康夫、三澤達也
8. 参考文献は、執筆者順に第4章末にまとめて記載した。

凡　例

1. 遺跡全体におけるX・Y座標は、日本測地系平面直角座標第Ⅳ区のX = -36,200,000、Y = 18,100,000（北緯35度40分24秒、東経138度42分00秒）を基点（X = 0、Y = 0）とした座標値である。なお、各遺構平面図中に示す方位は、すべて座標北を示している。

なお、真北方向角は0度7分00秒となる。

2. 遺構・遺物実測図の縮尺は、原則として以下の通りである。

遺構 堪穴住居・風呉木痕—1/60

炉・貯藏穴—1/30

溝—1/40、1/60

土坑—1/20

ピット—1/20

遺物 土器—1/3、石製品・土製品—1/2

3. 遺構図版中で使用したスクリーントーンの凡例は以下の通りである。

■ 石 ■ 焼土 ■■■ 地山土

4. 遺構図版中の遺物分布図のマークは以下の通りである。ただし、マークの向きは北位を基準としたものである。

米縄文土器 ● 弥生土器甕 ■ 弥生土器壺 ▲ 弥生土器鉢 △ 弥生土器高杯・鉢系

○ 弥生土器壺ないし甕 ✕ 土師器 ■ 土師質土器 ✕ 種別不明土器 ◊ 土製品 □ 石製品

▲ その他

5. 遺物図版中で使用したスクリーントーンの凡例は、以下の通りである。

■ 赤彩土器

6. 遺構同一図版中の標高は、原則として統一しているが、一部異なるものもあり明記してある。

7. 遺構図版中および土器観察表中の色調名は、農林水産省技術会議事務所監修 1990『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄）による。

8. 本書で用いた地図は、国土地理院発行の地形図（1:25,000）「塩山」「石和」である。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 序 説	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第3節 調査の方法	3
第4節 遺跡概要	3
第5節 基本層序	3
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 遺跡の地理的位置	5
第2節 遺跡の歴史的環境	5
第3章 遺構と遺物	
第1節 捄穴住居	9
第2節 上坑・ピット	14
第3節 風倒木痕	24
第4節 溝 跡	24
第4章 調査の成果	
第1節 遺跡のあり方について	30
第2節 石包丁について	30
参考文献	34
第5章 科学分析	
第1節 堀ノ内遺跡出土・石包丁の使用痕分析	35
おわりに	38

表目次

第1表 土坑・ビット一覧表	39
第2表 出土遺物観察表（土器）	40
第3表 出土遺物観察表（土製品）	43
第4表 出土遺物観察表（石器）	43

図版目次

第1図 遺跡全体図	2
第2図 遺跡基本土層	4
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第4図 1号竪穴住居平面図	10
第5図 1号竪穴住居炉・貯藏穴平面図	11
第6図 1号竪穴住居縄・遺物出土状況（1）	12
第7図 1号竪穴住居遺物出土状況（2）	13
第8図 1号竪穴住居遺物出土状況（3）	14
第9図 1号竪穴住居遺物出土状況（4）	15
第10図 土坑・ビット平面図（1）	16
第11図 土坑・ビット平面図（2）	17
第12図 土坑・ビット平面図（3）	18
第13図 土坑・ビット平面図（4）	19
第14図 土坑・ビット平面図（5）	20
第15図 土坑・ビット平面図（6）	21
第16図 土坑・ビット平面図（7）	22
第17図 土坑・ビット平面図（8）・風飼木裏平面図	23
第18図 1号溝平面図	25
第19図 1号溝縄・遺物出土状況	26
第20図 2号溝平面図・遺物出土状況	27
第21図 3号溝平面図	28
第22図 3号溝遺物出土状況	29
第23図 山梨県内出土の石包丁	32
第24図 出土遺物（1）	44
第25図 出土遺物（2）	45
第26図 出土遺物（3）	46
第27図 出土遺物（4）	47
第28図 出土遺物（5）	48
第29図 出土遺物（6）	49

写真図版目次

図版1	1 航空写真（1）	5 22号土坑全景
	2 航空写真（2）	6 23号土坑全景
図版2	1 1号竖穴住居全景	7 24号土坑全景
	2 同縄検出状況	8 25・26・31号土坑全景
	3 同遺物出土状況（1）	図版6 1 27号土坑全景
	4 同遺物出土状況（2）	2 28号土坑・2号ピット全景
	5 同遺物出土状況（3）	3 29号土坑全景
	6 同遺物出土状況（4）	4 30号土坑全景
	7 同遺物出土状況（5）	5 1号ピット全景
	8 同遺物出土状況（6）	6 風洞木炭完掘状況
図版3	1 1号竖穴住居炉	7 1号溝全景
	2 同ピット	8 同縄検出状況（1）
	3 同貯蔵穴	図版7 1 同縄検出状況（2）
	4 1号土坑全景	2 同縄検出状況（3）
	5 同遺物出土状況	3 2号溝全景
	6 2号土坑全景	4 3号溝全景
	7 3号土坑全景	5 調査風景（1）
	8 4～6号土坑全景	6 調査風景（2）
図版4	1 7号土坑全景	7 調査風景（3）
	2 8号土坑全景	8 調査風景（4）
	3 9号土坑全景	図版8 出土遺物（1）
	4 10号土坑全景	図版9 出土遺物（2）
	5 11号土坑全景	図版10 出土遺物（3）
	6 12・13号土坑全景	図版11 石包丁の使用痕（1－1）
	7 14号土坑全景	図版12 石包丁の使用痕（1－2）
	8 15号土坑全景	図版13 石包丁の使用痕（2－1）
図版5	1 16・17号土坑全景	図版14 石包丁の使用痕（2－2）
	2 18号土坑全景	図版15 石包丁の使用痕（3）
	3 20号土坑全景	図版16 石包丁の持ち方と操作方法復元
	4 21号土坑全景	

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

山梨市では、大野地区から上石森地区へ至る市道石森山南線道路改良事業を進めている。上石森地内の事業予定地内には、堀ノ内遺跡が所在することが明らかとなり、山梨市教育委員会では、2003年5月21日から7月12日にかけて試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生時代の堅穴住居をはじめとした遺構の存在が推定され、発掘調査が必要であると判断された。

2003年10月に山梨市より財団法人山梨文化財研究所に対し、市道石森山南線道路改良事業地内における発掘調査の依頼があり協議した結果、委託契約を結んで発掘調査および整理作業にあたることとした。

委託者を山梨市長、受託者を財団法人山梨文化財研究所理事長として、2003年11月11日に委託契約を締結し、事業にあつた。

調査体制

調査主体 財団法人山梨文化財研究所

調査担当者 宮澤公雄 財団法人山梨文化財研究所

発掘調査参加者 秋山恵美、奥山宗右、風間由美子、窪田信一、小泉紀子、直井光江、名取婦美子、

秋原忠、広瀬候子、深澤さつき、深沢芳邦、福間千鈴子、八木香代子

整理作業参加者 岩崎満佐子、小沢恵津子、齊藤ひろみ、田中真紀美、林紀子

第2節 調査経過

2003年

11月11日 委託契約締結、調査事務所設置・機材搬入

11月12日 表土剥ぎ開始

11月14日 発掘調査開始、遺構確認

11月15日 杖打ち

11月18日 遺構確認終了

11月21日 溝、土坑調査開始

11月22日 標準上層尖測、1号住居調査開始

11月26日 1号住居床面検出、紡錘車等出土

12月2日 1号溝遺物出土状況写真撮影

12月4日 風倒木痕調査開始

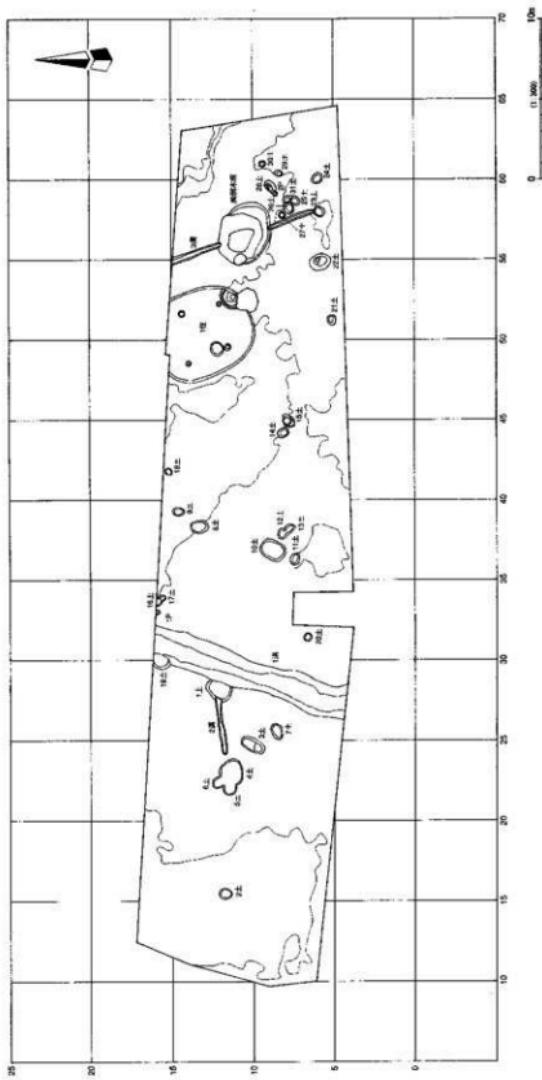
12月5日 1号住居遺物出土状況写真撮影

12月12日 1号住居完掘写真撮影

12月13日 航空写真測量、機材撤収

12月16日 補足測量

12月17日 調査事務所撤収、現地作業終了



第1図 遺跡全体図

第3節 調査の方法

調査区設定の後、重機により表土を除去し、引き続き人力による遺構確認作業を行った。確認された遺構は、構築年代の新しいものから順次調査を行ったが、一部新旧関係が不明な重複した遺構については同時に調査を行い、土層観察により新旧関係の決定を行った。

出土した遺物は遺構内のものについてはすべて、遺構外出土のものについても原位置が明らかなものは光波測量機器を用いて個別に取り上げを行い、遺物微細図はデジタルカメラによる測量を実施した。遺構の図化は、光波測量器による測量とデジタルカメラによる測量を併用した。

測量に用いた機器およびシステムは以下の通りである。

光波測量機器	TOPCON GPS III
コンピュータ	SHARP コベルニクス
取り上げ・図化システム	株式会社コンピュータ・システム製 SITE IV
デジタルカメラ図化システム	株式会社コンピュータ・システム製 SITE 3D

重機による表土剥ぎ終了後、調査区全体を被うように国土座標にあわせて南北方向をX軸、東西方向をY軸とするメッシュをかけ、南西隅を基点とした。旧測地系国土座標 X = -36,200,000m, Y = 18,100,000m を原点 (X = 0, Y = 0) とし、調査区内に 5m メッシュの杭打ちを行った。

また、調査では、光波測量器による遺物の取り上げを行ったため、東西、南北とも 1m のグリッドとして両軸とも整数を用いて表現した。

第4節 遺跡概要

本遺跡は、笛吹川の支流である重川によって形成された河岸段丘の段丘端に位置する。現在は果樹園となっているが、昭和30年代後半までは、水田が営まれていた地域である。

現在市民体育館が建つ地点は河岸段丘縁辺部にあたり、南側に展開する段丘下とは数mの比高差があったようである。体育館建設に伴う造成工事によって、段丘縁辺部を掘削し旧河川の段丘下を埋め立てたことにより、現在のような地形となっている。この造成工事の際、多くの縄文土器などが出土したという。これらのことから、本来本遺跡はかなりの広がりをもった濃密な遺跡であったことが考えられる。

今回の発掘調査の結果、弥生時代後期の堅穴住居 1軒、溝 3 条、土坑 31 基、ピット 2 基、風倒木痕 1 箇所などが発見された。

弥生時代後期の堅穴住居は、一部が調査区外に位置し全体を調査するには至らなかったが、焼失家屋といふこともあり、多くの土器などが出土した。

3 条の溝は時期不明なものもあるが、弥生時代後期の土器を出土した幅 1.5m ほどの溝は、集落を区画する溝の一部の可能性がある。

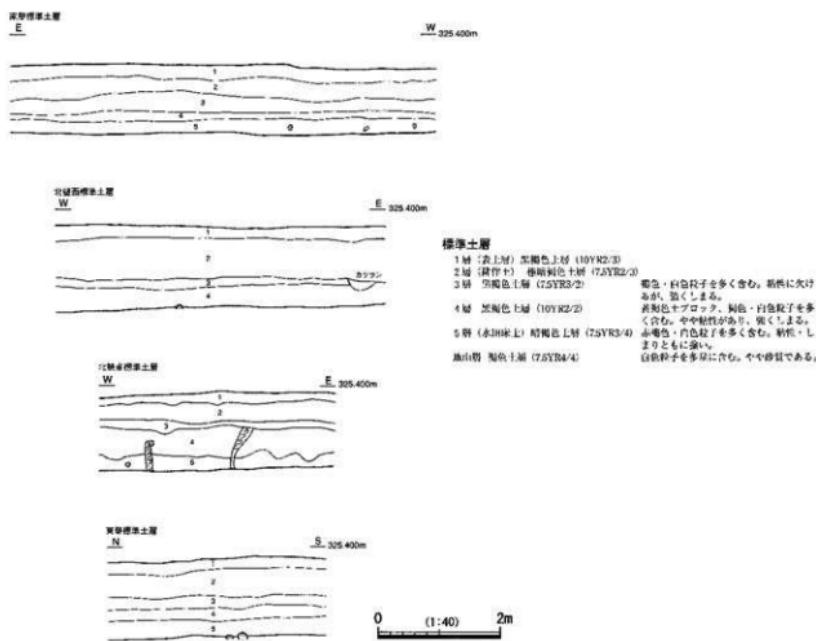
発見された土坑・ピットは、時期や性格を特定できるものはほとんどなく、柱穴列となるような配置もみられなかった。

第5節 基本層序

本遺跡は、河岸段丘縁辺部に位置しており、現在果樹園となっている。果樹栽培以前には水田であったために、水田の床土直下が遺構確認面となっていた。平坦面上に立地することから、調査区内において上層堆積に大きな変化は認められず、遺構確認面は地表から 55cm から 65cm ほどであった。第 1・2 層が表土なら

びに果樹園としての耕作土となる。第3・4層も水田の耕作上であり類似した土層であるが、第4層には黃褐色上ブロックが多く含まれていたことから、分層したものである。第5層が水山の床土となり、若干ではあるが遺物を包含する。ただし、調査区北壁西側では第5層はみられない。

本調査区においては、第5層と第6層（地山上）の境界付近に遺物の包含がみられたが、それほど濃密なものではなかった。遺構確認面は、やや砂質の褐色土（7.5YR4/4）となる。



第2図 遺跡基本土層

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の地理的位置

本遺跡の所在する山梨市は、県の中央部・甲府盆地の北東部に位置している。秩父山地（甲武信ヶ岳、国師ヶ岳）に源流をもつ笛吹川は、盆地内に至り、南西傾斜の広い扇状地を形成している。この笛吹川が、市域の中央部を南流し、南部を笛吹川の支流である重川、日川が流れ、これらの河川によって形成された氾濫原や扇状地が広がっている。市域はこの広大な扇状地と、奥秩父山地南麓の傾斜地上に立地している。

本遺跡は、笛吹川と重川に挟まれた地点にあり、両河川の合流地点より3.3kmほど上流の北東に位置する。遺跡周辺は、南西に緩やかに傾斜した笛吹川扇状地が広がっているが、遺跡は扇状地が重川によって侵食された河岸段丘の縁辺部、標高325m付近に立地している。

第2節 遺跡の歴史的環境

山梨市域ではこれまでに、旧石器・縄文時代51箇所、弥生・古墳時代48箇所、奈良・平安時代105箇所、中・近世62箇所の遺跡が知られている。

旧石器時代の遺跡は、石器等が発見されたものではなく、兄川河床遺跡（9）からナウマン象の化石が発見されたことから、当該期の遺跡としたものである。

縄文時代の遺跡は、市内全域から発見されており、大野の高畠遺跡（93）は、縄文時代中期の堅穴住居跡7軒が発見され、多くの土偶なども出土している。

弥生時代の遺跡は、氾濫原や扇状地上に立地している。落合の延命寺遺跡（51）からは、東海系の土器などが出土している。また、高畠遺跡からは、弥生時代後期の赤彩された箱清水系の高杯などが発見されているが、堅穴住居などの遺構は検出されていない。

新環状・西関東道路建設工事に伴って発掘調査が実施された上岩下の小武家遺跡からは、古墳時代前期の土器を出土した溝が確認されているが、炭化物の年代測定の結果、弥生時代後期に開削された可能性があることが明らかとなっている。

また、宗高東遺跡からは、大型の石鍬5点がまとまって採集されている。この石鍬は出土した状況は不明であるが、類似した例が南アルプス市百々遺跡ではまとめて埋められていたことから、同様に埋納されていたことが想定され、弥生時代中期のものであると考えられている。

市内の古墳は、山裾地帯の上岩下、山根地区に集中しているが、沖積地上に立地する上神内川、上栗原地内にも数基がみられる。上栗原地内に所在した中塙無名墳（121）、沖田無名墳（124）はいずれも現存しないが、直刀をはじめとした武器や馬具などが副葬されていた。

上岩下地内の中塙古墳群には、全長10.55mの横穴式石室を有する牧洞寺古墳や同じく石室全長9.16mの天神塚古墳などが含まれ、4基の古墳が現存する。いずれも、甲府盆地北東部地域においては傑出した石室規模を誇り、当時この地域が有力な地域であったことは明らかである。上岩下に隣接する山根地区には山根古墳群が展開する。市史編さん事業に伴い、2000年に実施された市内詳細分布調査によって存在が明らかとなつた古墳群である。昭和初期に耕作によってほとんどが削平され、現存する古墳は1基にとどまるが、かつては40基以上の古墳が群集していた可能性が高い。これら、いずれの古墳も後期になってから築造されたもので、前期・中期の古墳は確認されていない。

一方、古墳時代の集落遺跡の様相は必ずしも明らかとはなっていない。落合の中沢遺跡では、2軒の堅穴住居と溝が調査されている。また小武家遺跡では、1軒の堅穴住居と2基の方形周溝が発見されている。その他、日川地区的松畠東遺跡（108）、足原田遺跡（61）など古墳時代前期の遺跡が調査されているが、堅穴住居跡は発見されていない。いずれの遺跡も、集落の一部のみの調査にとどまり、集落の様相を明らかにす



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

るまでには至っていない。

また、市内全城の分布調査によっても山梨市域に古墳が盛んに築造される古墳時代後期の土器などもまったく見つかっておらず、大型の古墳を築いた人々の集落が、どのように分布していたか未解明なままである。甲府盆地でも有数な大型の横穴式石室を構築していることから、大規模な集落の存在が想定されるが、沖積地の地中深く埋もれている可能性が高い。

奈良・平安時代の遺跡は、笛吹川および重川・日川が形成した扇状地上に広く展開している。日下部遺跡(35)は、9世紀後半から10世紀代に営まれた集落遺跡で、堅穴住居跡28軒、掘立柱建物跡1棟などが発見された。土師器・須恵器などの日常雑器のほか、腰帯具、多量の墨書き土器なども出土しており、古代加美郷の中心的集落であったと考えられる。戦後間もない頃の調査で、史学的にも著名な遺跡である。先の高畠遺跡でも、南側の微高地において、堅穴住居跡3軒が発見された。この微高地上にはさらに多くの住居が埋もれているとされ、古代の大野郷の一部を構成していたムラであったと考えられる。

- | | |
|--------------------------------|-----------------------|
| 1 堀ノ内遺跡（縄文・弥生・平安） | 33 八王子遺跡（縄文） |
| 2 芦原遺跡（平安） | 34 安田義定館跡（中世） |
| 3 江曾原遺跡（縄文・古墳・平安） | 35 日下部遺跡（縄文・奈良・平安・中世） |
| 4 市川東遺跡（縄文） | 36 下ノ原遺跡（縄文） |
| 5 犬塚遺跡（平安） | 37 大堀遺跡（奈良・平安） |
| 6 積詰裏遺跡（平安・中世） | 38 安田義定館跡（中世） |
| 7 西片山遺跡（中世・近世） | 39 西久保遺跡（縄文・平安） |
| 8 上コブケ遺跡（縄文・古墳・平安） | 40 相畑北遺跡（古墳） |
| 9 兄川河床遺跡（凹石器） | 41 相畑南遺跡（中世） |
| 10 清水陣屋遺跡（近世） | 42 飛沢遺跡（中世・近世） |
| 11 霊八幡神社（中世） | 43 三ヶ所梨木遺跡（平安） |
| 12 霊八幡神社社家坊中群（中世・近世） | 44 唐土遺跡（古墳・中世） |
| 13 中下西遺跡（平安） | 45 上之割八千子遺跡（平安） |
| 14 荒神山窯跡（平安・中世） | 46 富士塚（近世） |
| 15 中鳥遺跡（縄文・平安） | 47 長源寺前古墳（古墳） |
| 16 下河原遺跡（中世・近世） | 48 金桜遺跡（縄文・平安） |
| 17 下弥勒遺跡（縄文・平安） | 49 地蔵久保遺跡（平安） |
| 18 天神原北遺跡（縄文・平安） | 50 三牧地遺跡（平安・中世） |
| 19 西ノ窪遺跡（縄文・平安） | 51 延命寺遺跡（弥生・古墳・平安） |
| 20 天神原南遺跡（平安） | 52 原ノ前遺跡（奈良） |
| 21 権現窪経塚（中世・近世） | 53 塚之内遺跡（平安） |
| 22 宮ノ前（七日子）遺跡
（縄文・古墳・奈良・平安） | 54 落合館跡（中世） |
| 23 中沢遺跡（古墳・平安） | 55 屋敷遺跡（平安・中世） |
| 24 十十堂遺跡（奈良・平安） | 56 正徳寺前田遺跡（平安） |
| 25 阿弥陀堂遺跡（縄文・古墳・奈良・平安） | 57 林際遺跡（平安） |
| 26 宮ノ西遺跡（古墳・中世） | 58 天神前遺跡（縄文・平安・中世） |
| 27 神明遺跡（奈良・平安） | 59 間之田東遺跡（平安） |
| 28 狐塚遺跡（平安） | 60 間之田西遺跡（古墳・平安） |
| 29 御屋敷北遺跡（平安） | 61 足原田遺跡（古墳・平安） |
| 30 御屋敷南遺跡（縄文・平安） | 62 日下部病院前遺跡（古墳） |
| 31 天神原遺跡（平安） | 63 平塚遺跡（平安） |
| 32 立石遺跡（縄文・奈良・平安） | 64 塚越遺跡（古墳・中世） |
| | 65 平塚古墳（古墳） |

- 66 船荷塚古墳（古墳）
67 松原遺跡（中世）
68 寺の下遺跡（縄文）
69 浅間遺跡（平安・中世）
70 吉原遺跡（平安）
71 橋口遺跡（古墳・平安・中世）
72 大橋遺跡（平安・中世）
73 河野氏屋敷（中世・近世）
74 新町東遺跡（縄文）
75 原遺跡（古墳）
76 ふじ塚古墳（古墳）
77 速方屋敷（中世）
78 三ヶ所遺跡（平安・中世）
79 東後屋敷遺跡（縄文・奈良・平安・中世）
80 武田金吾屋敷跡（中世）
81 上手原遺跡（縄文）
82 鍛冶屋久弥遺跡（古墳）
83 櫻木遺跡（古墳）
84 三宮寺遺跡（平安・中世）
85 九ツ塚遺跡（平安・中世）
86 五軒尊遺跡（平安）
87 櫻本町遺跡（平安）
88 市道遺跡（平安）
89 杉ノ木遺跡（古墳・平安）
90 宗高北遺跡（平安）
91 前田遺跡（平安）
92 大野砦跡（中世）
93 高畠遺跡（縄文・弥生・古墳・平安）
94 天神前北遺跡（平安）
95 天神前東遺跡（縄文・平安）
96 宗高南遺跡（弥生・古墳）
97 宗高東遺跡（縄文・弥生）
98 雲林遺跡（古墳・平安）
99 屋敷添遺跡（縄文・平安・中世）
100 上石森塚越遺跡（縄文・平安）
101 宮ノ前遺跡（平安）
102 上黒木遺跡（奈良・平安・中世）
103 金山林遺跡（古墳・平安）
104 四安陣屋跡（近世）
105 西条遺跡（平安）
106 歌田金桜遺跡（平安）
107 松畑西遺跡（古墳）
108 松畑東遺跡（縄文・古墳・奈良）
109 琵琶塚（中世・近世）
110 御嶽堂遺跡（古墳）
111 複屋町遺跡（弥生・古墳・平安）
112 北川通遺跡（平安）
113 西田遺跡（縄文・平安）
114 宮後遺跡（平安）
115 上町遺跡（古墳・平安・中世）
116 栗原氏屋敷跡（中世）
117 栗原氏屋敷跡（中世）
118 東小路遺跡（縄文・平安）
119 上沼遺跡（古墳・平安）
120 大林北遺跡（縄文・弥生・古墳・平安・中世）
121 中壇無名墳（古墳）
122 大林南遺跡（平安）
123 中道北遺跡（平安）
124 沖田無名墳（古墳）
125 中道南遺跡（平安）
126 雁行堤（近世）

第3章 遺構と遺物

第1節 壁穴住居

1号壁穴住居

遺構の概要（第4～9図）

調査区の中央よりやや東の北側、X=13、Y=51グリッドを中心に位置する。東側には3号溝が、南東には風倒木痕がある。住居北側は調査区外に位置し、調査するには至らなかった。小判型の平面プランを呈し、主軸をN-25°-Wにとる。南北の現存長5.65m、東西5.5m、深さは東側で0.3m、西側で0.33m、南側で0.19mを測る。住居南東は重機による搅乱を受けている。柱穴を四隅に配するが、住居の主軸とは軸をやや異にする。住居南東コーナーには住居内土坑が設けられていた。土坑は、東西長0.81m、深さ0.42mを測る。土坑南側は、搅乱によって削平を受けているため、南北長は不明である。土坑の周りには、地山土を掘り残した凸堤が半円状に巡っている。凸堤の幅は約30cm、高さ9cm前後を測る。

南西柱穴の北側には、東西90cm、南北82cm、深さ13cmほどの浅い皿状の土坑が確認された。検出状況から本住居に伴うものと考えられるが、用途は明らかではない。

床面は住居の中心部や炉の周辺で良好な硬化面がみられた。

住居は焼失家屋で、床全面に炭化物および焼土が確認されたが、建築部材がまとまりをもって出土したような状況ではなかった。

炉（第5図）

住居の中央より北西の中央付近に位置する。東西32cm、南北44cm、深さ7cmとなる。北側以外の3方を長径25cm、幅10cmほどの細長い砾で囲んでいた。炉底面の被熱状況はそれほど顕著なものではなく、底面および覆土中に焼土はそれほど確認できなかった。炉の南脇には焼土が塊となって廃棄されていた。

遺物出土状況（第6～9図）

住居中央付近から北側にかけて、拳大から人頭大を越えるような大型の礫が多数廃棄されていた。礫は、遺構確認面から床面直上よりやや上のレベルまでに分布しており、壁穴住居廃絶後、まもなく廃棄されたものと思われる。

土器などの出土遺物は、これらの礫下より発見されたものがほとんどである。住居は焼失家屋ということもあり、住居内からは豊富な遺物が出土している。壺類は、住居北寄りに設けられた炉の南側を中心として、炉の周辺から10数個体分の土器が出土している。

一方、壺類は壺類の周辺から出土する傾向にある。住居西側からは、台付と無台の小型壺がともにほぼ完形で出土した。

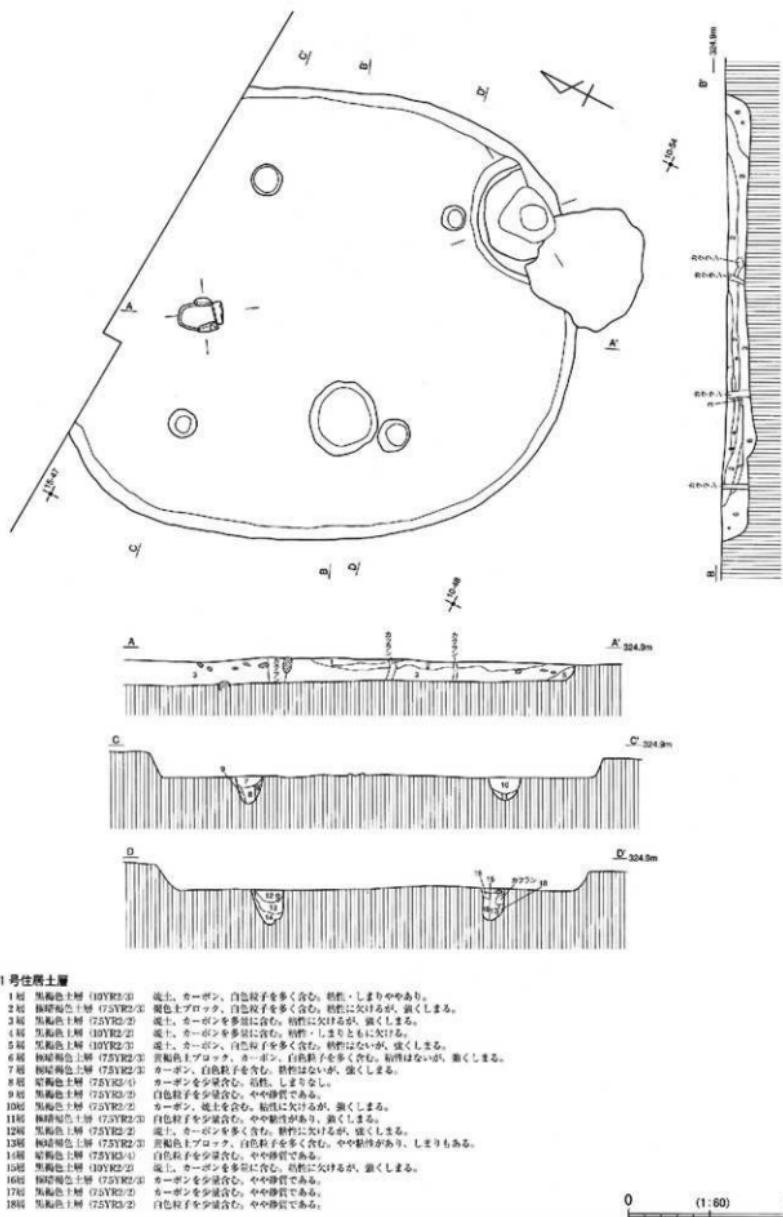
石包丁や石鍬などの石製品は、住居の北東から集中して出土している。2点出土している、土製紡錘車も同様な分布状況にある。また、手握土器2点が炉の西側より出土している。

一方、住居内土坑からは、遺物がほとんど出土しておらず、土器の小破片が出土したにすぎない。

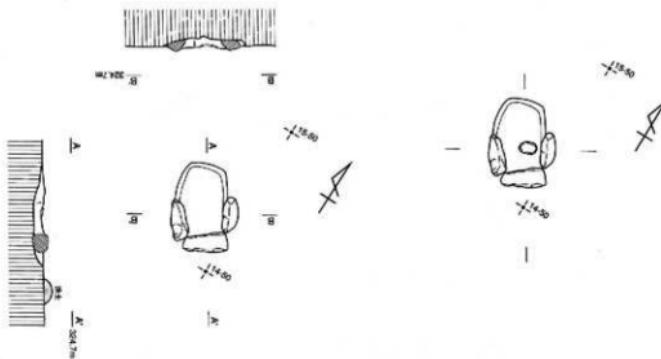
出土遺物（第24～26図）

住居内からは多くの土器が出土しているが、壺と壺が人半を占める。その他の器種としては、鉢類が数点みられるのみである。

第24図1・2は小型の壺である。1には脚がつき、外面全体に赤彩が施されている。同3～9は壺口縁部資料であるが、折り返し口縁をもつものと單口縁となるものがある。3は折り返し口縁を持ち、折り返し縁部には指頭圧痕を明瞭に残す。頭部には横方向の櫛描文施文後、縱方向に櫛描をするいわゆるT字文をもち、赤彩が施されている。4は口縁部に棒状浮文をもつ。5は折り返した口縁部に刻みを施す。9は單口縁の口唇部に刻みをもち、頭部には荒い櫛描波状文を施す。同12～18は壺の底部資料であるが、壺と断定できない

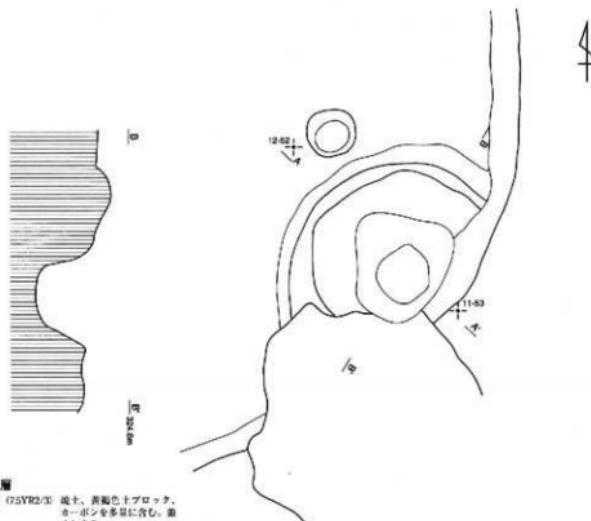


第4図 1号竪穴住居平面図



1号住居炉土層

1番 黒褐色土層 (7SYR2/2) 板土ブロック・カーボンを多く含む。粘性、しまりなし。



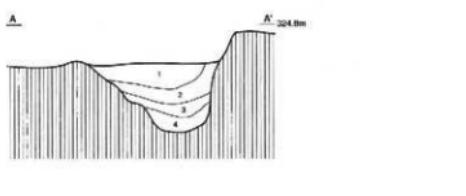
1号住居貯藏穴土層

1番 黄褐色土層 (7SYR2/3) 泥土、黄褐色土ブロック、カーボンを多量に含む。重くしまる。

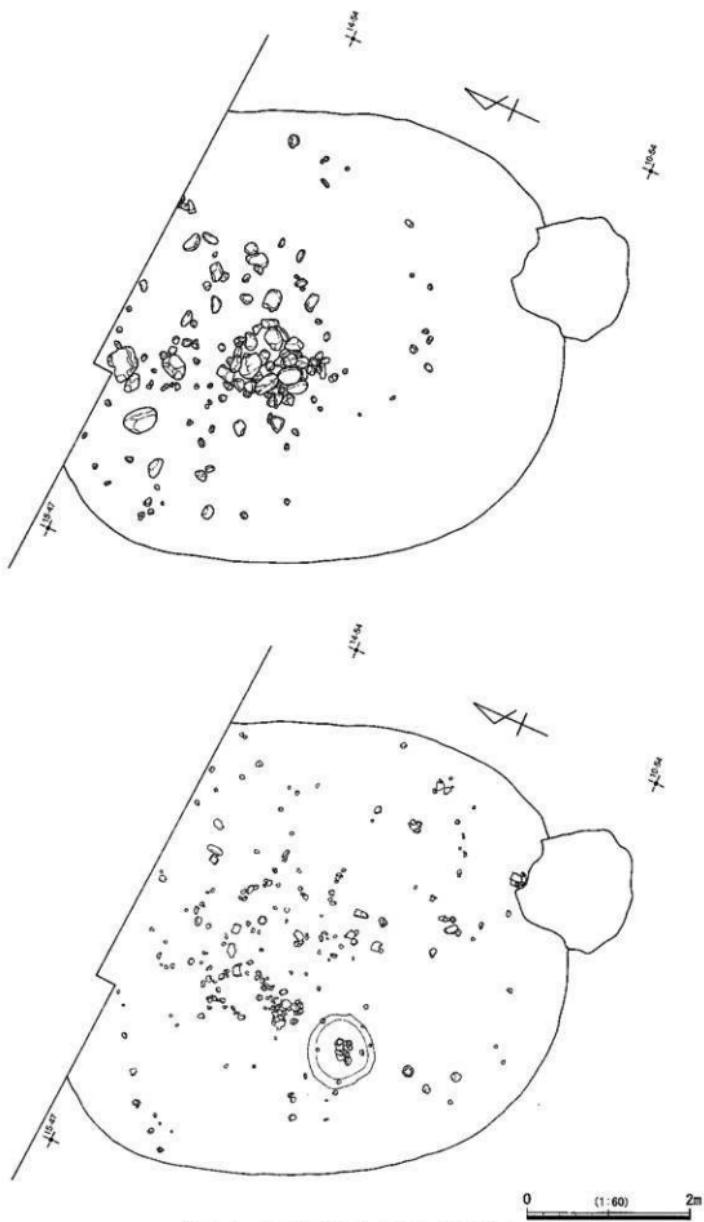
2番 黑褐色土層 (7SYR2/2) 泥土、カーボンを多く含み、黄褐色土粒も少しある。

3番 黑褐色土層 (7SYR2/2) 黄褐色土ブロックを少含む。やや粘性があり。しまりある。

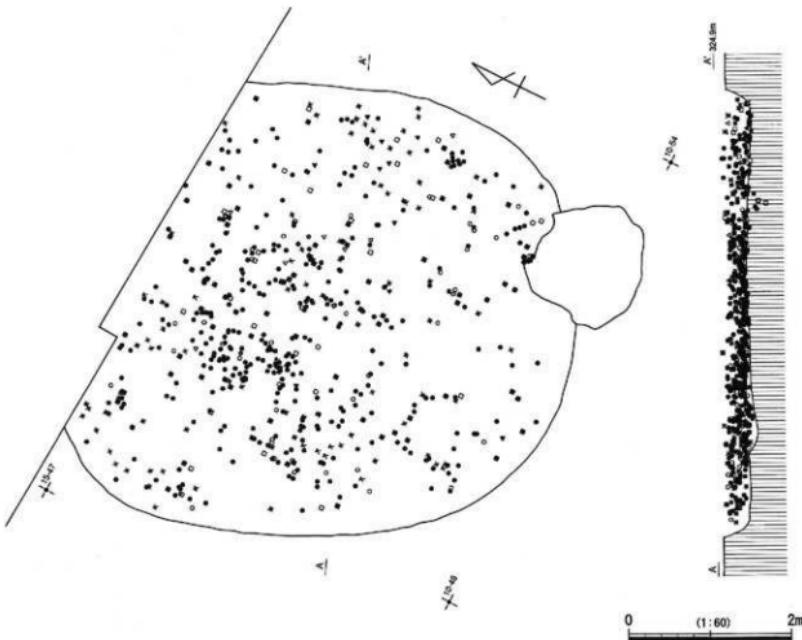
4番 黃褐色土層 (7SYR2/3) 黄褐色土ブロック、白色粒子を少量含む。しまりはあるが、やや砂質である。



第5図 1号竪穴住居炉・貯藏穴平面図



第6図 1号竪穴住居跡・遺物出土状況(1)



第7図 1号竪穴住居遺物出土状況（2）

資料も含んでいる。12には赤彩が施されている。

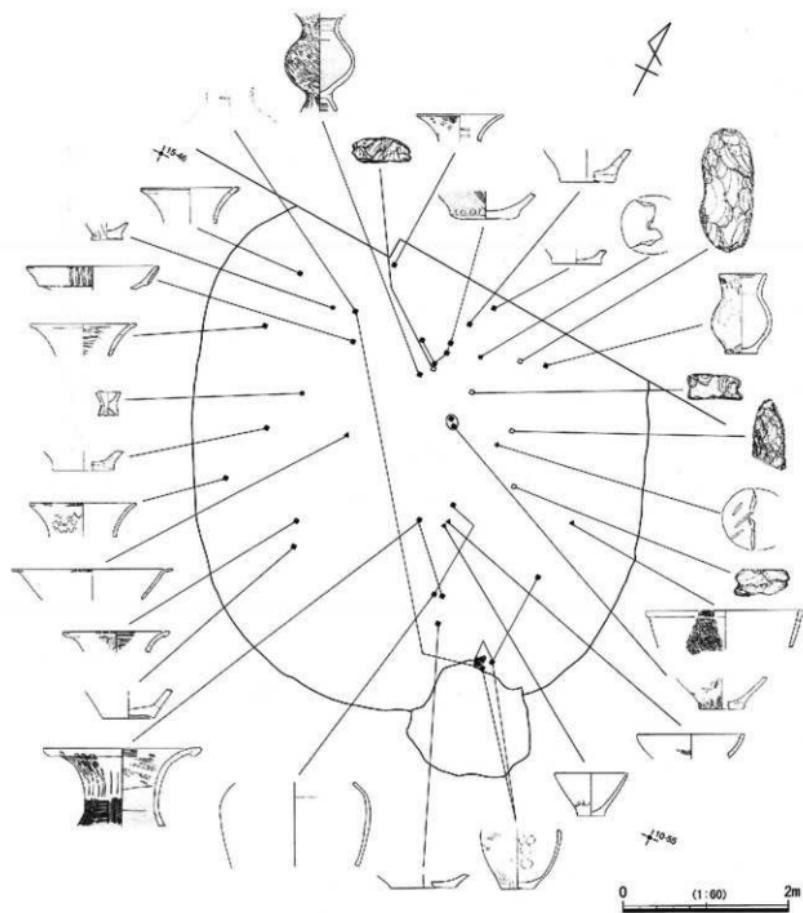
第25図1～14、第26図1～12は甕の資料であるが、大型品と小型のもの（第25図9・10・13）がみられる。外面をハケメ調整を施しただけのものと擗描波状文を施すものがある。1・10の底部には木葉痕が遺る。第26図13～15は脚部で、台付甕の脚部と思われる。

同17は塊型の土器と思われる。

同18～20は鉢で、18は底部に木葉痕を遺す。20は体部に縄文を施す。

第28図15・16は土製紡錘車で、いずれも半分ほどを欠損する。同17・18は手捏土器。

同20～22は磨製石包丁である。いずれも片刃を意識して作成され、両端には抉りをもつが、20・22のみ抉り内側を丁寧に研磨している。一方、21は2次整形が行われた痕跡がみられない。石包丁に多くみられる円孔は穿たれていない。22は刃部の大半を欠損する。第29図1・2は打製石鎌ないし石斧で、1は長さ20cm、最大幅8.4cmを測る大型品で、基部の中央がくびれる分頭形を呈する。2は刃部を欠損する。



第8図 1号竪穴住居遺物出土状況（3）

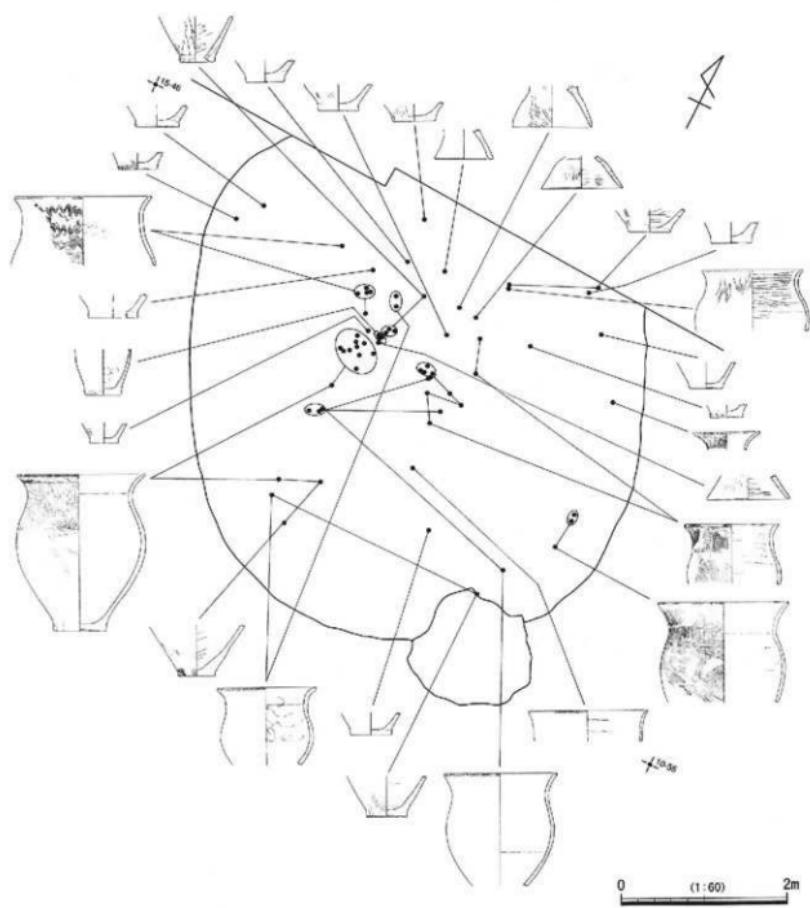
第2節 土坑・ピット

本遺跡からは、31基の土坑と2基のピットが発見されている。土坑とピットの区分は、径30cm程を境界として大きいものを土坑、小さいものをピットとした。ただし、厳密に区分したものではない。個々の遺構のデータについては、第1表にまとめたのでそちらを参照されたい。

土坑

遺構の概要（第1表・第10～17図）

土坑は、調査区の全体に広がりをみせているが、西側ではやや希薄となっている。X = 12、Y = 25グリッド

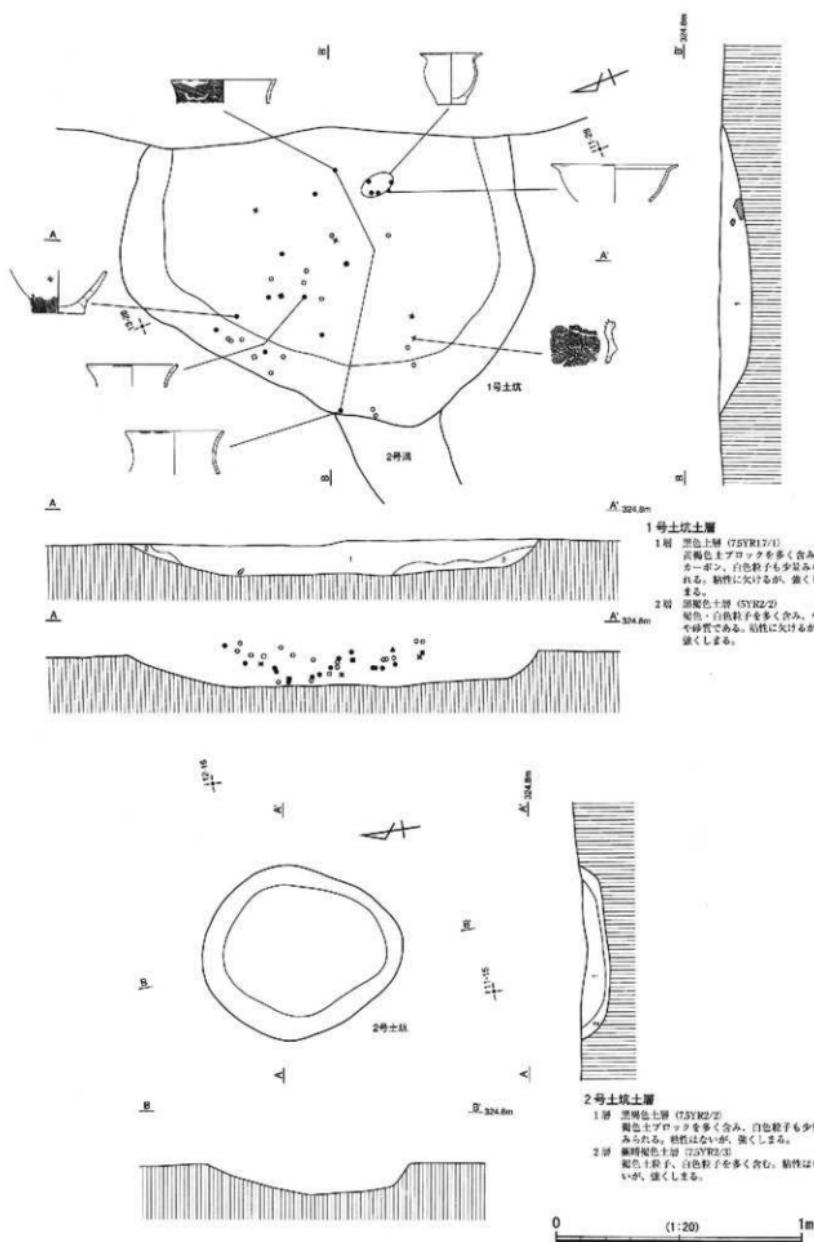


第9図 1号竪穴住居遺物出土状況（4）

D、X=11、Y=41グリッド、X=7、Y=56グリッドを中心とした付近にいくつかのまとまりをみるとことができる。

出土遺物もそれほど多くはなく、多くは土器の小破片が数点出土するような例が多い。唯一、1号土坑にわずかながらまとまった弥生土器がみられ、弥生時代後期に属するものと推定されるほかは、年代を特定するような出土状況を示す遺物は出土していない。

第26図21～27は1号土坑出土遺物である。21は小型甕である。22から24はいずれも口唇部に刻文を有する。26は口唇部に刻文を有する鉢である。



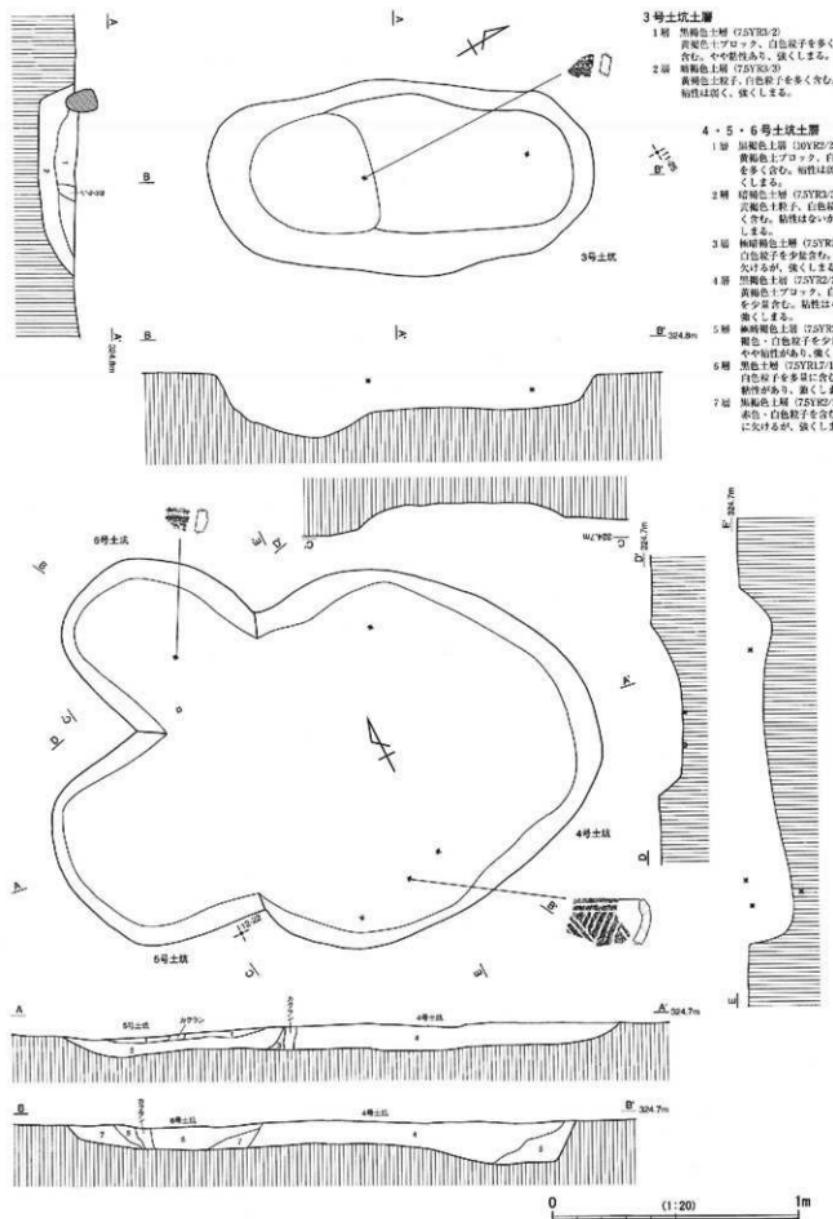
第10図 土坑・ピット平面図 (1)

3号土坑土層

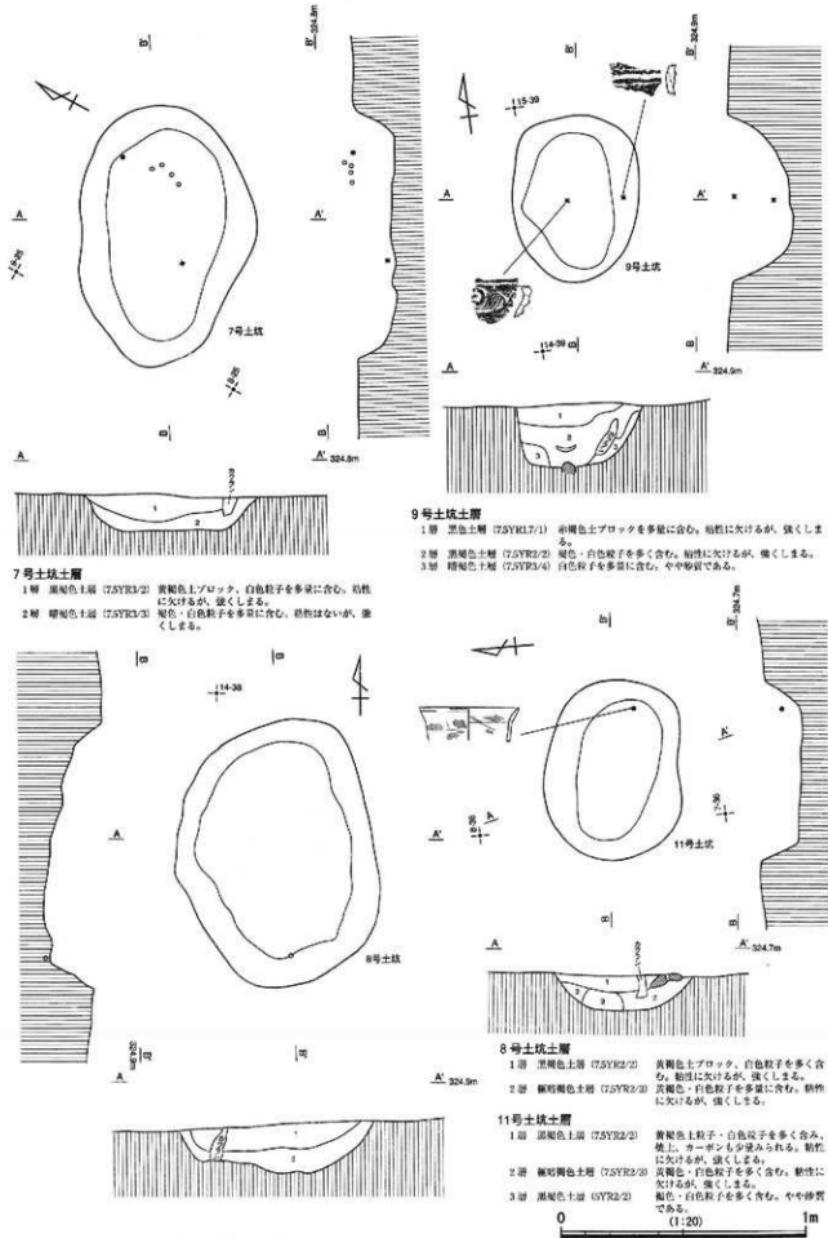
- 1層 黄褐色土層 (SYR2/2)
黄褐色土上にロック、白色粒子を多く含む。やや粘性あり、強くしまる。
- 2層 黄褐色土層 (SYR2/2)
黄褐色土粒子、白色粒子を多く含む。粘性は弱く、強くしまる。

4・5・6号土坑土層

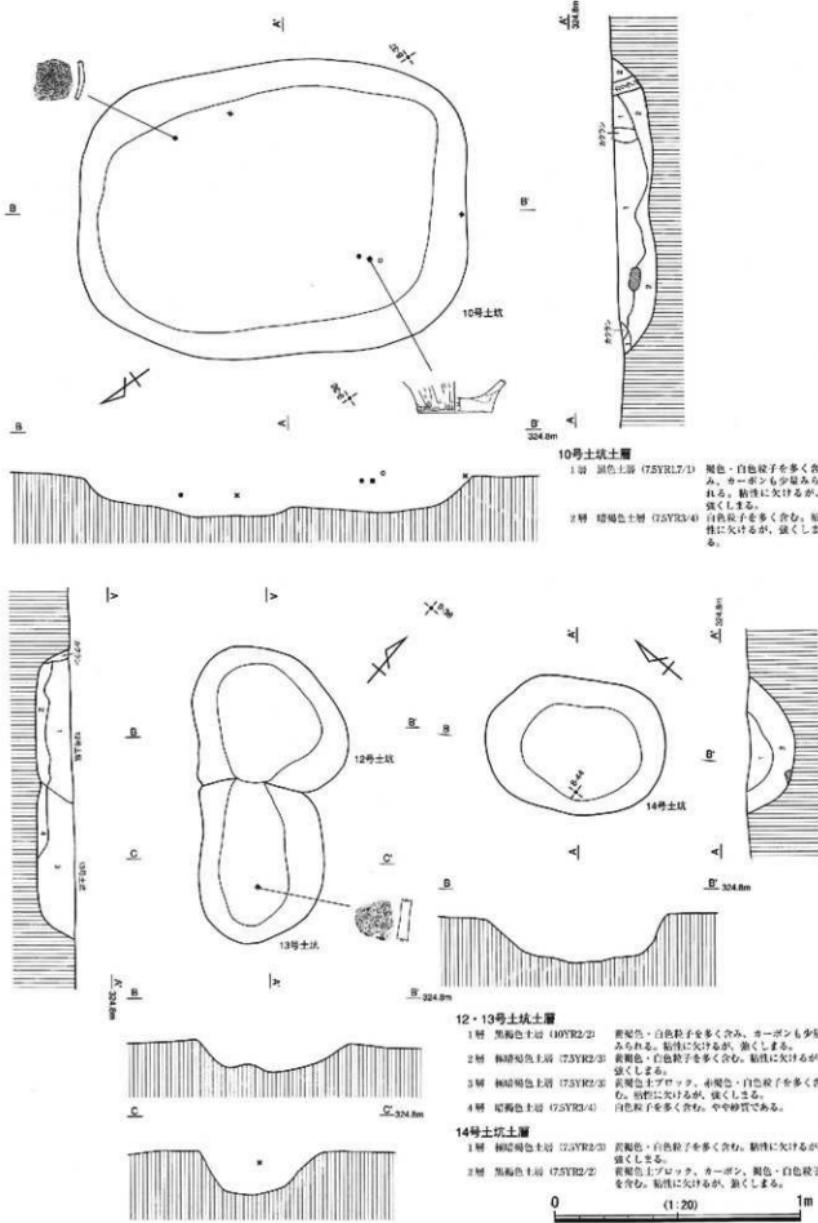
- 1層 屋根色土層 (SYR2/2)
黄褐色土上にロック、白色粒子を多く含む。粘性は弱く、強くしまる。
- 2層 短距離土層 (SYR2/3)
云母土粒子、白色粒子を多く含む。粘性はないが、強くしまる。
- 3層 黄褐色土層 (SYR2/2)
白色粒子を多少含む。粘性に欠けるが、強くしまる。
- 4層 黑褐色土層 (SYR2/2)
黄褐色土上にロック、白色粒子を多く含む。粘性はないが、強くしまる。
- 5層 棕褐色土層 (SYR2/3)
銀色、白色粒子を少し含む。やや粘性があり、強くしまる。
- 6層 黑色土層 (SYR2/1)
白色粒子を多量に含む。やや粘性があり、強くしまる。
- 7層 黑褐色土層 (SYR2/2)
赤色、白色粒子を含む。粘性に欠けるが、強くしまる。



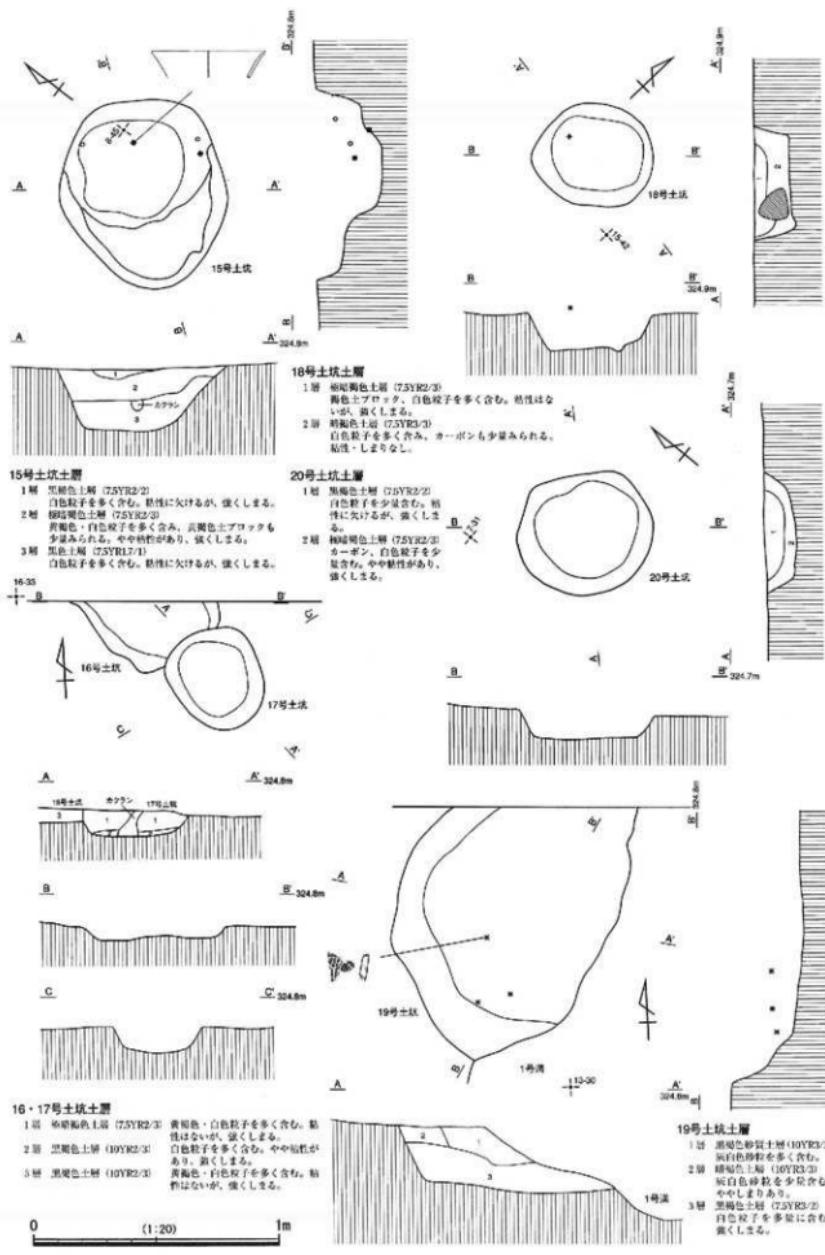
第11図 土坑・ビット平面図（2）



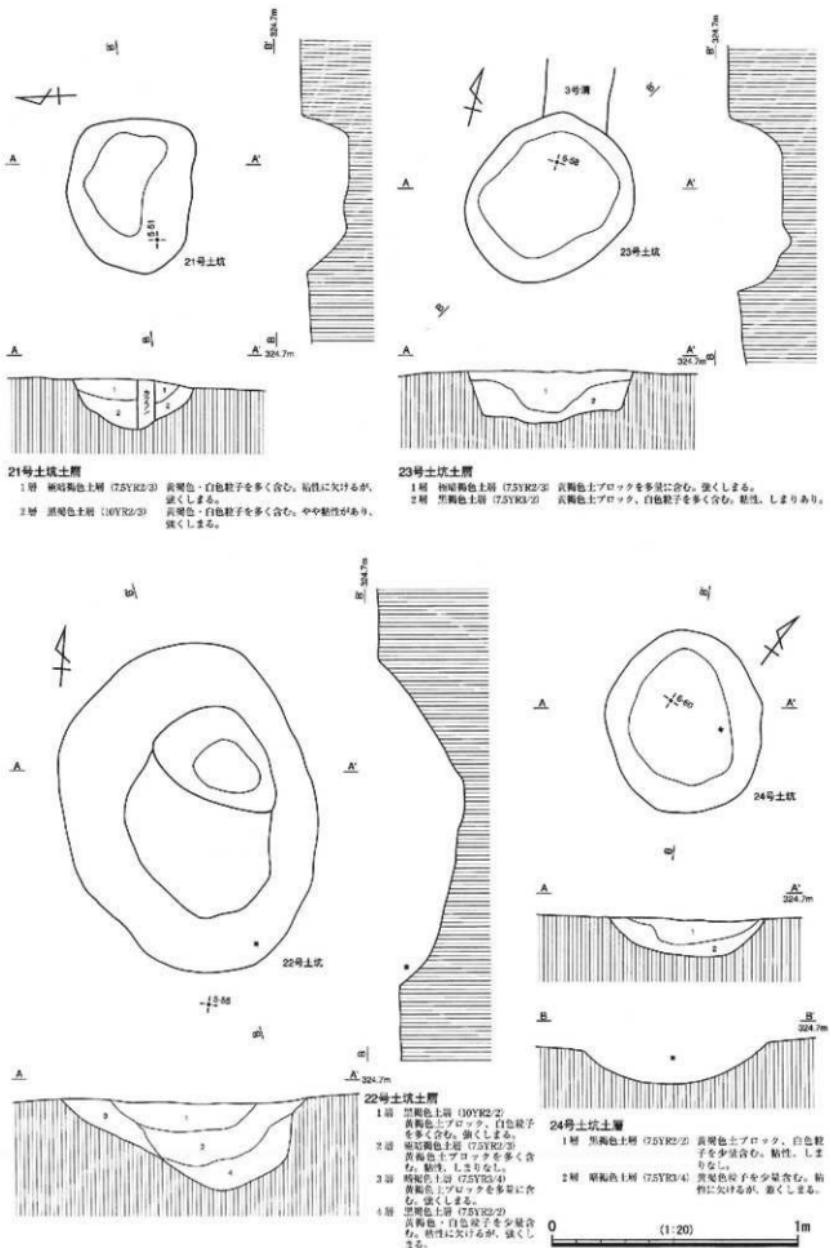
第12図 土坑・ピット平面図 (3)



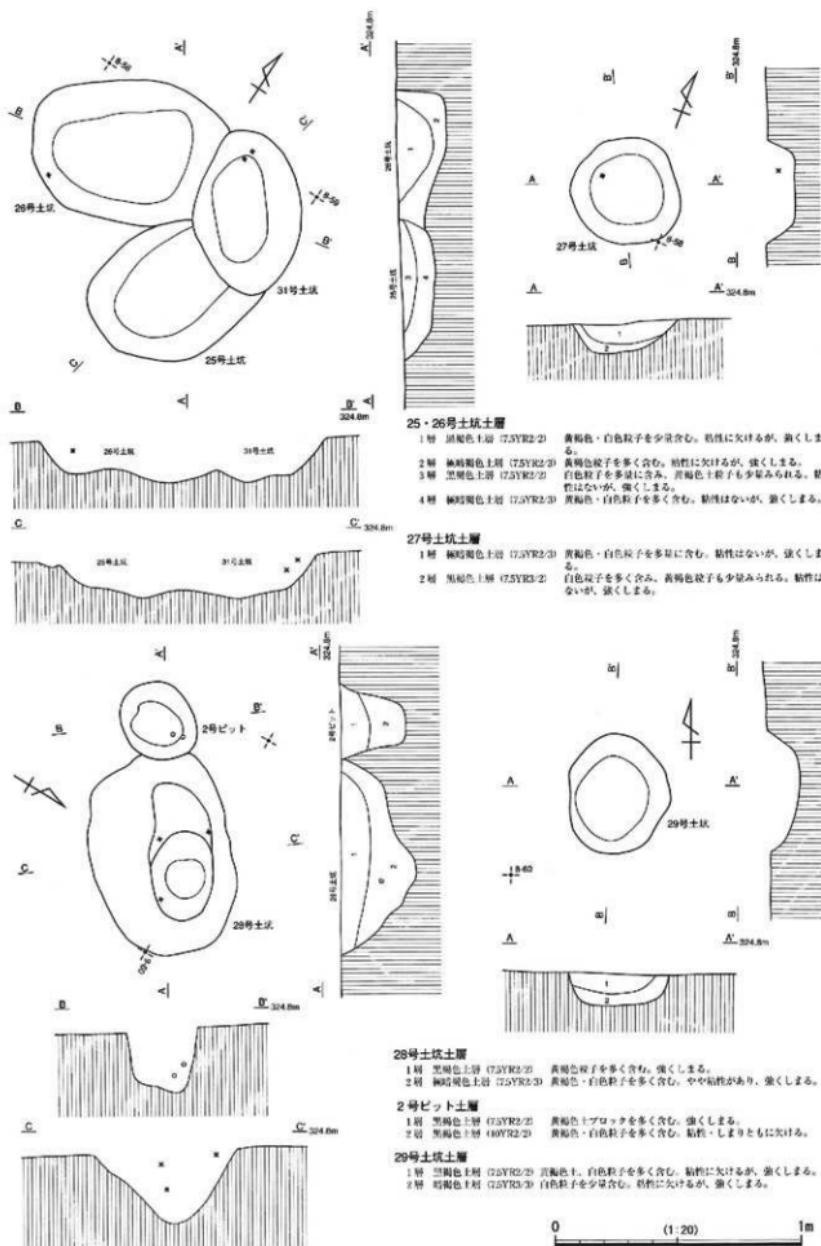
第13図 土坑・ピット平面図 (4)



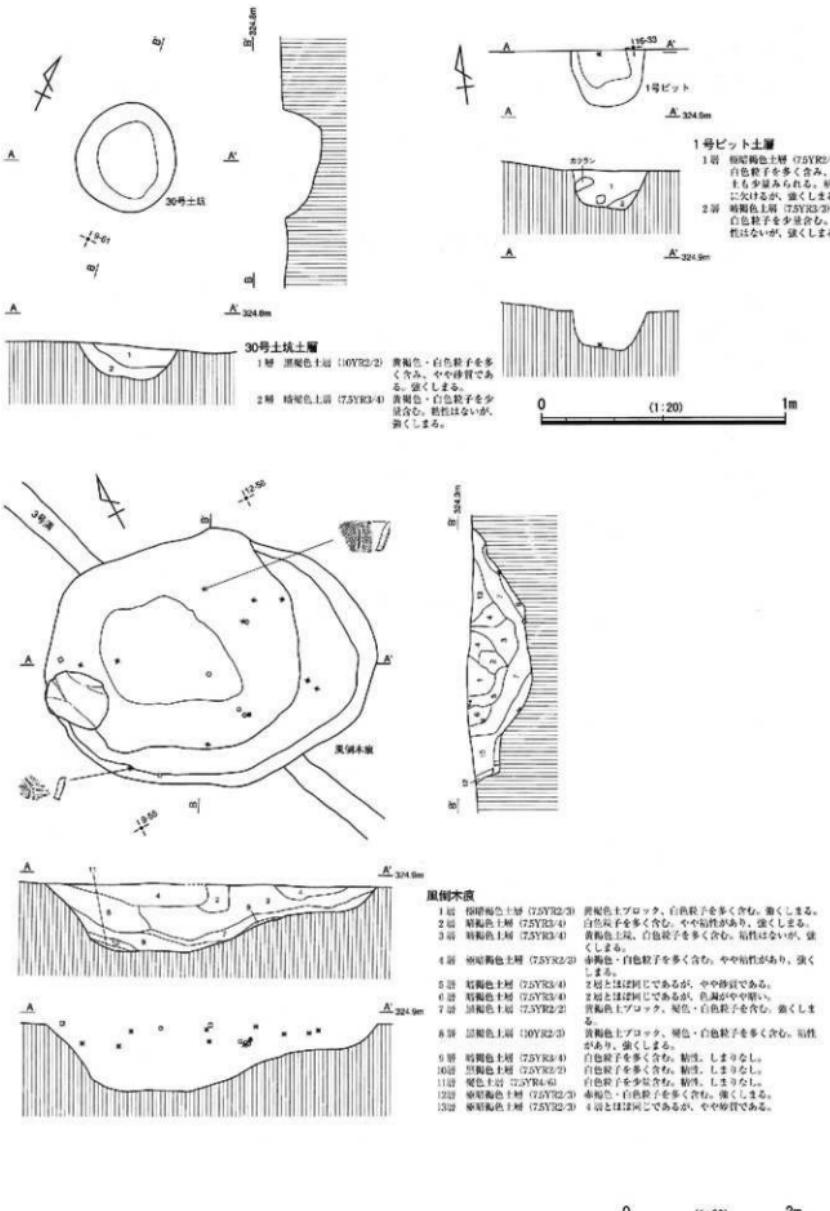
第14図 土坑・ピット平面図（5）



第15図 土坑・ビット平面図 (6)



第16図 土坑・ピット平面図 (7)



第17図 土坑・ピット平面図(8)・風倒木痕平面図

ピット

遺構の概要（第1表・第16・17図）

径が30cm以下となるようなピットは、1号溝北東の1基と風倒木痕南東の1基のみであり、柱穴列になるような例はない。

両ピットとも出土遺物はほとんどなく、1号ピットからは縄文土器が1点、2号ピットからは弥生土器が2点、いずれも小破片で出土しているにすぎず、いずれも遺構の年代を示すものではない。

第3節 風倒木痕

遺構の概要（第17図）

調査区の東側、X = 11、Y = 57グリッド付近を中心位置する。西側には1号住居が隣接する。この倒木は3号溝埋没後に起こったもので、3号溝を南北に分断している。東西4.04m、南北3.14m、深さ0.83mを測る。

遺物出土状況（第17図）

倒木時に生じた地山土の隙間に埋没した黒色土中より縄文土器10点、弥生土器5点、黒曜石2点などの小破片が出土している。

出土遺物（第27図）

第27図12・13は縄文土器である。

第4節 溝 跡

1号溝

遺構の概要（第18図）

調査区の中央よりやや西、X = 10、Y = 29グリッド付近を中心位置する。主軸をN - 19° - Eにとり、現存長12.54m、幅1.64から2.21m、深さ0.32から0.4mを測る。断面は、緩やかなV字形ないしU字形を呈している。溝は、調査区の南北にさらに延びている。1・19号土坑と重複しているが、両土坑より新しい。

遺物出土状況（第19図）

覆土中には、拳大から径40cmほどの大型のものまで、多くの礫が廃棄されていた。とくに、溝南側では、多量の礫がまとまって検出された。

上器は、これらの礫の間ないし礫下から出土している。130点ほど出土した遺物のうち、多数を縄文土器の小破片が占めるが、弥生時代後期の壺や壺の破片も出土しており、溝の開削は弥生時代後期に行われたものと考えられる。

出土遺物（第27図）

第27図14は、弥生時代後期の壺底部資料である。底部には木葉痕を遺す。同25は弥生時代の壺である。同16～23は縄文時代中期の深鉢小破片である。

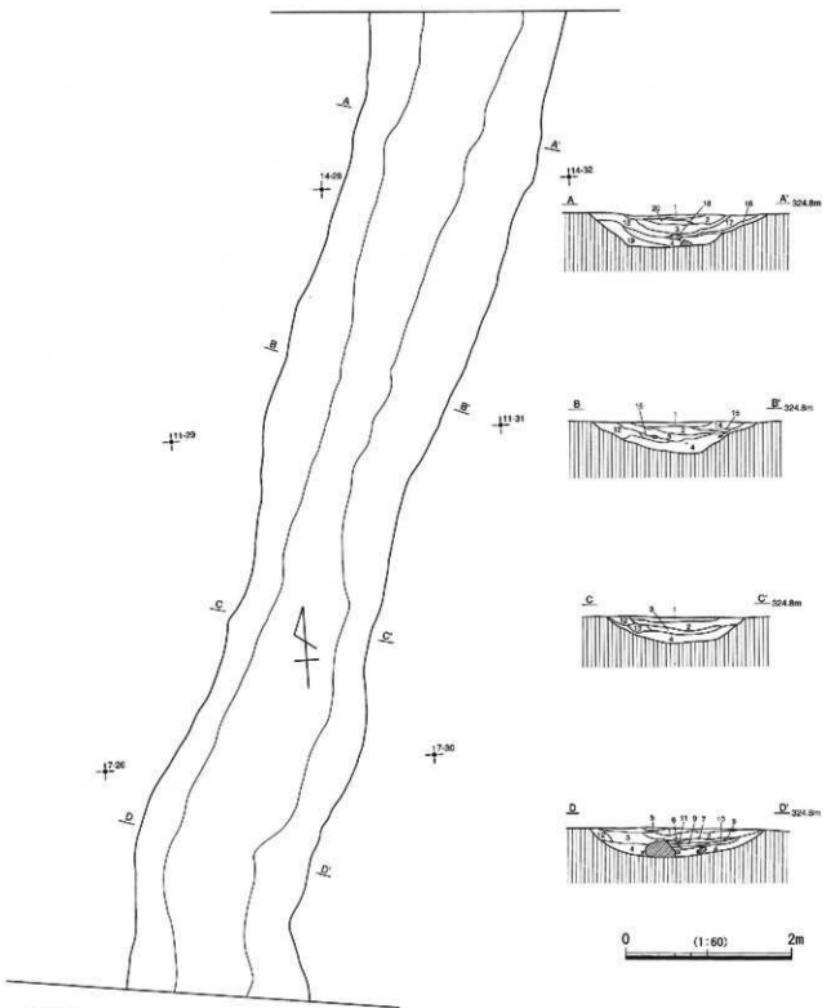
2号溝

遺構の概要（第20図）

調査区の中央より西側、X = 12、Y = 26グリッド付近を中心位置する。西側には4～6号土坑がある。東側には1号土坑があり、本溝を切っている。主軸をN - 83° - Eにとり、現状での長さ3.58m、幅約0.28から0.37m、深さ0.13mを測る。溝断面は、U字形を呈する。

遺物出土状況（第20図）

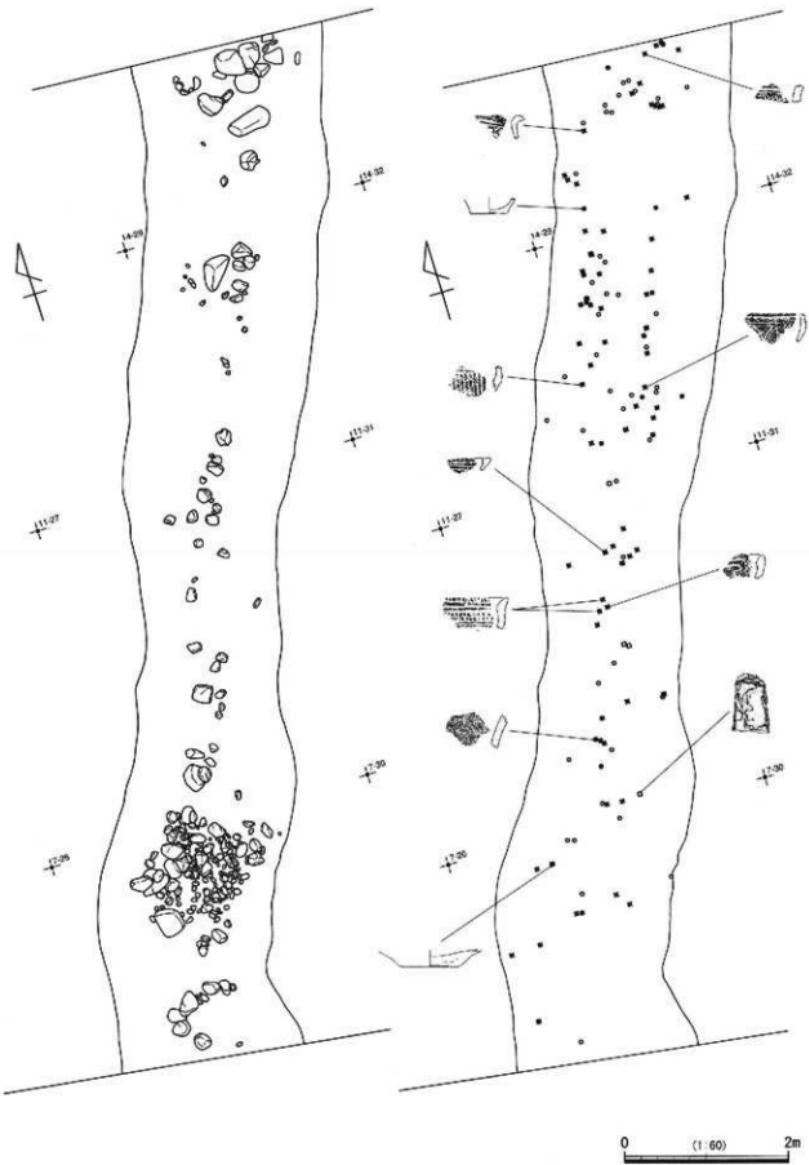
遺構が小規模なこともあり、出土遺物はほとんどなく、わずかに縄文土器の小破片が5点ほど出土したに



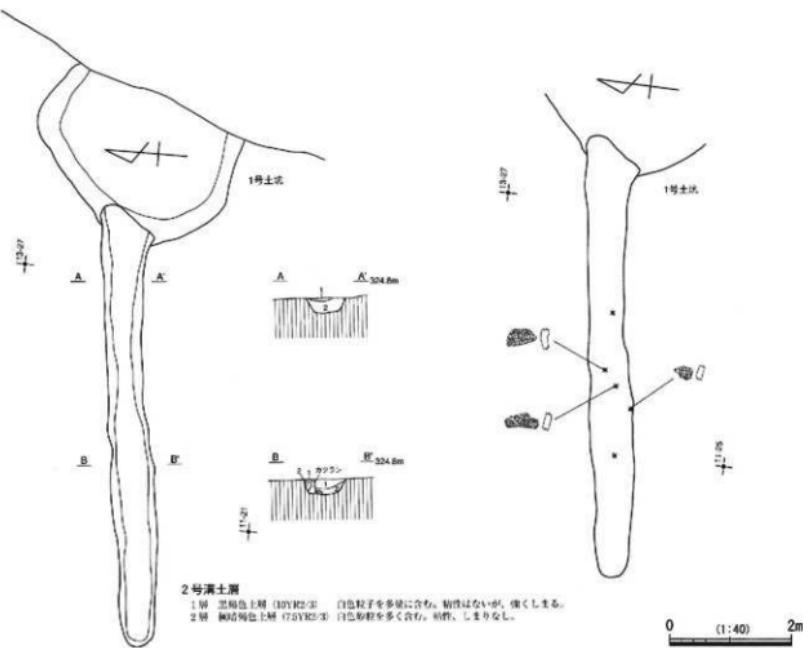
1号溝土層

- 1 級 黄褐色砂質土層 (10YR2/3) 黄褐色土+ブロック、白色砂粒を多く含む。
2 級 黄褐色土層 (10YR2/2) 白色砂粒を多く含み、黄褐色土+ブロックを少量含める。粘性、土よりあり。
- 3 種 黑褐色土層 (75YR3/22) 黄褐色砂粒を多く含み、黄褐色土+ブロックを少量含める。粘性に欠けるが、やや強くしまる。
- 4 種 黑褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土+ブロック、灰白色砂粒を多く含む。やや砂質で硬くなる。
- 5 種 黄褐色砂質土層 (10YR2/2) 灰色砂粒を多く含む。
- 6 種 黄褐色土層 (10YR2/2) 灰色砂粒を多く含む。粘性に欠けるが、しまりあり。
- 7 種 黑褐色土層 (10YR2/1) 黄褐色土+ブロック、灰白色砂粒を多く含み、カーボンも少量含みられる。やや粘性があり。強くしまる。
- 8 種 黑褐色砂質土層 (10YR2/3) 灰色砂粒を多く含む。
- 9 種 黑褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土+白子層 (10YR2/3) 黄褐色土+ブロック、白色砂粒を多く含む。粘性はないが、強くしまる。
- 10 種 黄褐色砂質土層 (10YR2/2) 黄褐色土+ブロック、白色砂粒を多く含む。粘性はないが、強くしまる。
- 11 種 黑褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土+ブロック、白色砂粒を多く含む。粘性はないが、強くしまる。
- 12 種 黑褐色土層 (10YR2/2) 黄褐色土+白子層 (10YR2/3) 黄褐色土+ブロック、白色砂粒を多く含む。粘性はないが、強くしまる。
- 13 種 黑褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土+ブロック、白色砂粒を多く含む。粘性に欠けるが、強くしまる。
- 14 種 黄褐色砂質土層 (10YR2/2) 黄褐色土+ブロック、灰白色砂粒を多く含む。粘性に欠けるが、強くしまる。
- 15 種 黄褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土+ブロック、灰白色砂粒を多く含む。粘性に欠けるが、強くしまる。
- 16 種 黑褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土+ブロック、灰白色砂粒を多く含む。粘性に欠けるが、強くしまる。
- 17 種 黄褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土+ブロック、灰白色砂粒を多く含む。カーボンも少しあらわる。やや砂質である。
- 18 種 黑褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土層、灰白色砂粒を多く含む。粘性に欠けるが、強くしまる。
- 19 種 黑褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土層、白色砂粒を多く含み、カーボンも少量含む。
- 20 種 黑褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土+ブロック、白色砂粒を多く含む。

第18図 1号溝平面図



第19図 1号清礫・遺物出土状況



第20図 2号溝平面図・遺物出土状況

すぎない。出土遺物はいずれも小破片であり、本溝跡に伴う遺物とは考えられず、開削時期は不明である。

出土遺物（第27図）

第27図24~26は、いずれも縄文時代中期の深鉢小破片である。

3号溝

遺構の概要（第21図）

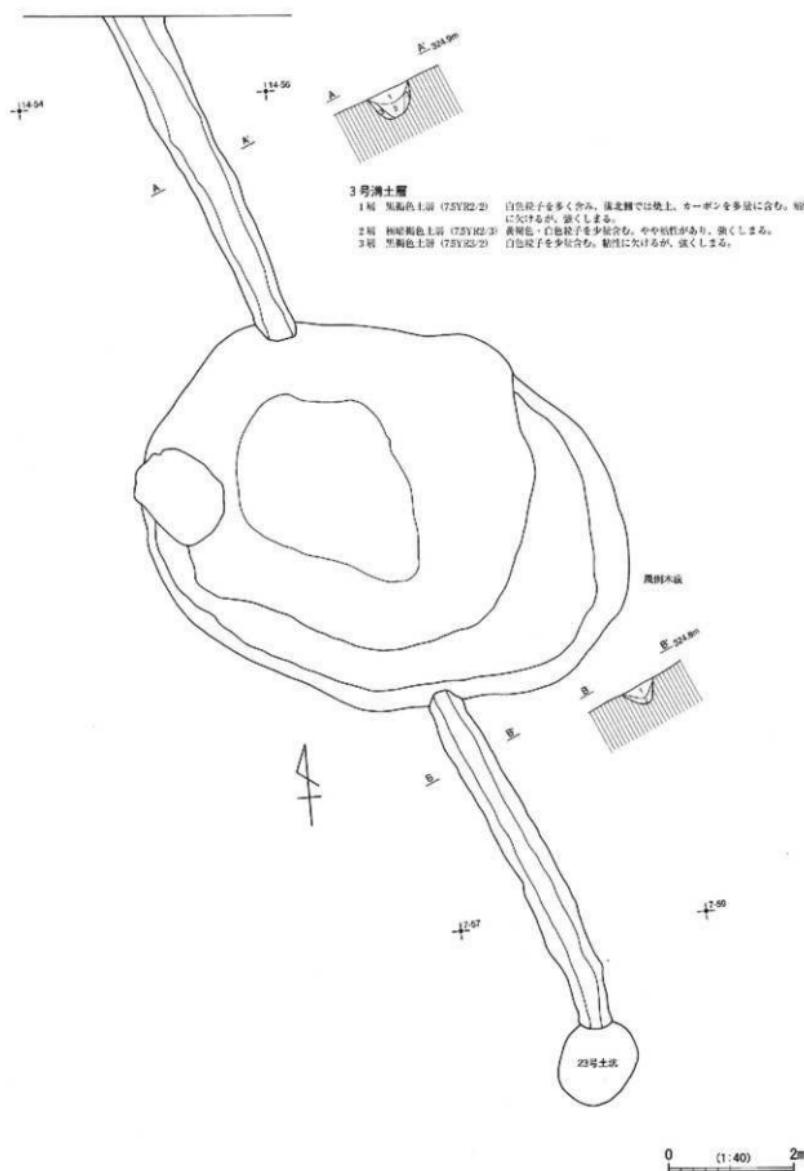
調査区の西側、X=11、Y=57グリッド付近を中心位置する。西には1号住居が隣接する。溝の中央は風倒木痕によって破壊を受けている。また、南端は23号土坑によって切られている。主軸をN-20°-Wにとり、さらに北側の調査区外に延びているが、現状での長さ9.14m、幅0.28から0.42m、深さ0.09から0.12mを測る。断面は底部が比較的平坦なU字形を呈している。

遺物出土状況（第22図）

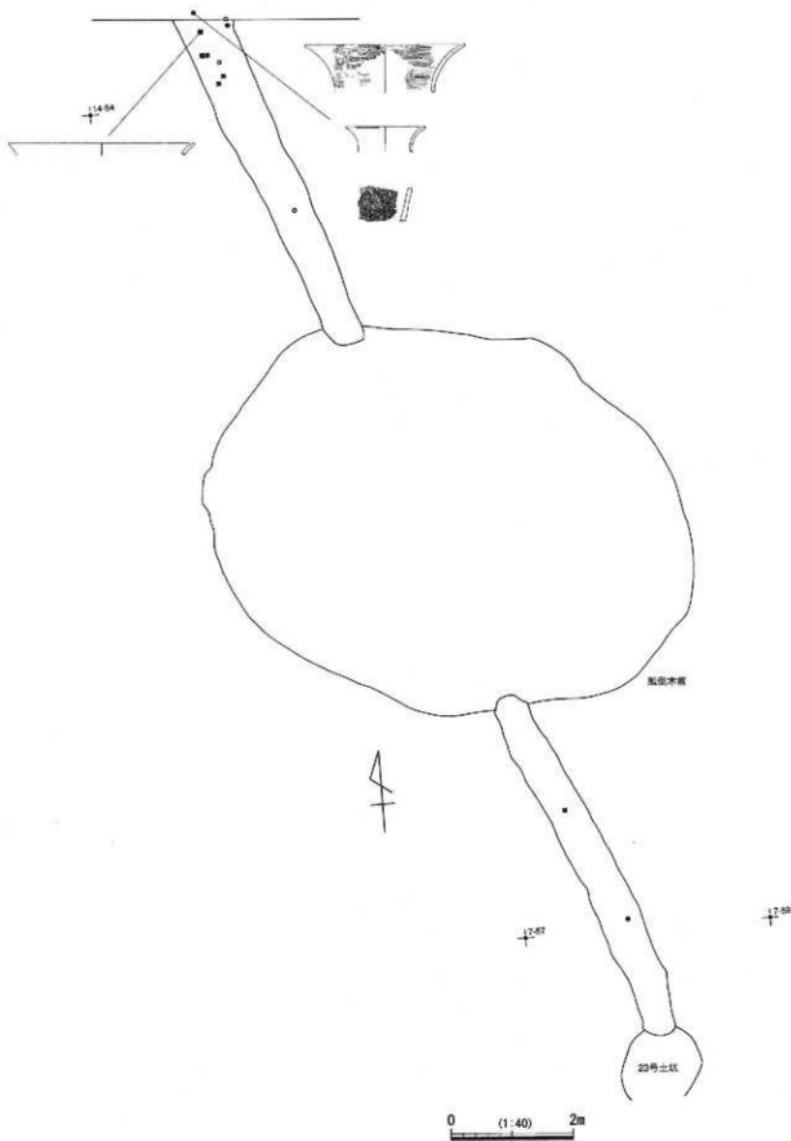
溝南側では、遺物がほとんど出土していないが、北側の調査区境界付近では焼上とともに、いずれも小破片となってはいたものの、弥生土器がまとまって出土した。弥生時代後期の土器がある程度まとまって出土したことから、この時期に開削されたものと考えられる。

出土遺物（第27図）

第27図27は赤彩が施されていることから、壺口縁部の資料と思われる。同28・29は、壺口縁部資料。いずれも口唇部に刻文をもち、29は口縁部直下から頸部にかけて荒い櫛描波状文を施す。



第21図 3号溝平面図



第22图 3号沟遗物出土状况

第4章 調査の成果

第1節 遺跡のあり方について

今回の発掘調査では、弥生時代後期の竪穴住居1軒、土坑31基、ピット2基、溝3条などが発見された。

調査区内においては、縄文時代の遺構として断定できるものを検出することはできなかった。しかし、遺構外からではあるが縄文時代中期の土器が出土しており、付近に集落が展開しているであろうことは想像に難くない。事実、調査区南側に位置する市民体育館の造成工事の際には、多数の縄文土器が出土したことが明らかとなっている。

弥生時代後期の竪穴住居は、調査区北東で確認された。そのほか弥生時代後期の遺構と考えられるものに、1・3号溝、1号土坑があるが、その他の遺構についてはまとまった出土遺物などもほとんどなく、遺構が構築された時代を特定することはできない。

小規模な発調査面積のため、周辺に複数の住居が存在したのかも含め、どのような集落を形成していたのか明らかにすることはできない。1号竪穴住居から西へ15mほど離れた地点には南北に延びる、1号溝がある。1号溝は、幅1.6~2.2m、深さ0.3~0.4mほどを測る比較的大型の溝であった。出土遺物はわずかであったが、廃棄された砾より下層の溝底面付近から弥生時代後期の壺底部などが出土しており、この時期に開削されたものと判断した。

1号竪穴住居と1号溝が同時期に存在したかどうかは明らかではないが、同じ後期の所産ということからするならば、1号溝が集落を区画するような役割を果たした溝であった可能性も指摘できる。調査区の西側では、同一事業のための試掘調査を実施しているが、弥生時代後期はおろか、遺跡の存在を確認していない。また、調査区東側は、段丘底位面になっていることからすると、縄文時代中期の遺跡および弥生時代後期の遺跡は調査区の南北に展開していたことが想定される。

第2節 石包丁について

本遺跡の1号竪穴住居からは、磨製石包丁が3点出土している。いずれも幅76mm前後、長さ35mm前後で、両側刃に抉りをもち、刃部は片側に鏽をもつ片刃状に作られている。

山梨県内出土の石包丁については、山梨県史編さん事業に伴う考古資料編において、大島正之氏によって集成がなされている（大島1999）。

また、2003年には、保坂康夫氏によって弥生時代の石器の集成が図られ、石包丁についてもまとめられている（保坂2003b）。

弥生時代における石包丁の山梨県内からの出土は、決して多いものではなく、その後の調査によって明らかにされたものもあるが、本遺跡例も含め8遺跡11例ほどを数えるにすぎない。

甲斐市（旧敷島町）金の尾遺跡（山梨県教育委員会1987）

金の尾遺跡は、荒川によって形成された扇状地の扇尖部に立地し、中央自動車道建設に先立って行われた発掘調査をはじめとして、これまでに計6回にわたる発掘調査が実施されている。調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居33軒、方形周溝墓24基、溝などが発見されている。第1次調査で発見された17号住居は、後期の櫛状波状文を主体とする土器を出土しており、打製石包丁2点が伴出している（第23図1・2）。刃部はほぼ直線的に作られ、片刃を意識しているようである。背は弧状を呈しており、両端部には抉りなどはみられない。

蘿崎市堂の前遺跡（蘿崎市教育委員会1987）

塙川によって侵食された、茅ヶ岳山麓西端と七里岩台地東側の片山に挟まれた塙川右岸の氾濫源は低地となり、通称「蘿井平」と呼ばれる。堂の前遺跡は、その低地上に立地し、弥生時代後期の豊穴住居4軒、奈良・平安時代の豊穴住居16軒、溝1条などが発見されている。そのうち、20号住居からは粘板岩製の磨製石包丁1点が出土している（第23図3）。刃部が直線的で、背は弧状を呈する。背のほぼ中央に単孔がみられ、両側面から研磨している。

蘿崎市下横屋遺跡（蘿崎市教育委員会1991）

下横屋遺跡は、堂の前遺跡の800mほど南側にあり、同じく低地の「蘿井平」に立地する。これまでに数次にわたる発掘調査が実施されているが、第1次調査においては、弥生時代後期の豊穴住居8軒、平安時代の豊穴住居2軒が検出されている。そのうち10号住居からは、頭部にT字文およびC字文を付加した甕とともに、粘板岩製の磨製石包丁が出土している（第23図4）。刃部は直線的に作られ、片刃に仕上げられている。背部および端部は丁寧に研磨されている。また、端部中央ではなく背に近い部分の両端に抉りをもつ。

南アルプス市（旧櫛形町）六科丘遺跡（櫛形町教育委員会1985）

六科丘遺跡は、市之瀬台地の縁辺部に位置し、弥生時代末期の豊穴住居33軒をはじめ、土坑、溝などが発見されている。3号豊穴住居からは、粘板岩製の磨製石鎌とともに、粘板岩製の磨製石包丁が出土している（第23図5）。石包丁は、刃部が直線的に作られ、片側にわずかながら鏽をもつように、片刃に仕上げられている。肩は弧状を呈している。

増穂町平野遺跡（山梨県教育委員会1993）

平野遺跡は、甲府盆地南西部に位置し、山地の崖壁性の緩斜面上に立地する。2度にわたる発掘調査によって弥生時代後期末の豊穴住居34軒が発見されている。第1次調査の11号住居から粘板岩製の磨製石包丁が出土している（第23図6）。住居の遺構確認段階で出土しているため、本住居に作うものではない可能性もあるが、弥生時代後期の遺構、遺物しか検出されていないため、弥生時代後期のものとみて問題はない。石包丁は、刃部をほぼ直線的に作り、片刃に仕上げ、背は弧状となる。背、両端面とともに丁寧に研磨している。円化および側面の抉りは認められない。

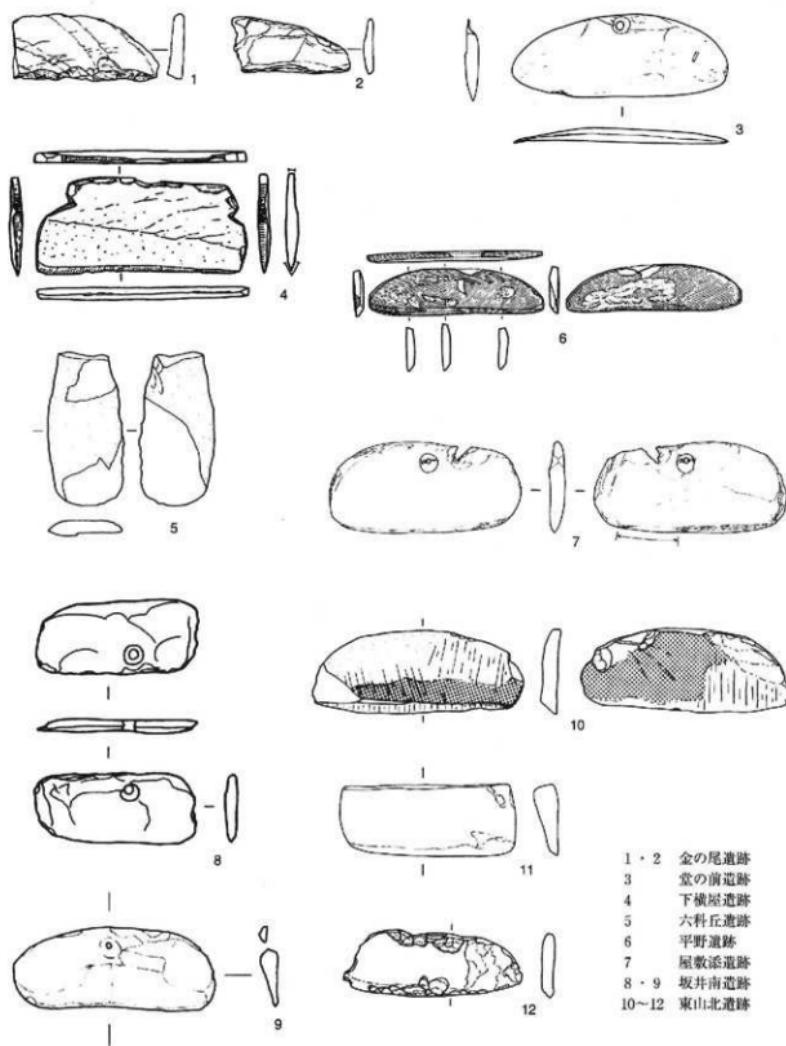
北杜市（旧明野村）屋敷添遺跡（山梨県明野村教育委員会1993）

屋敷添遺跡は、茅ヶ岳山麓の東西に走る小谷に挟まれた台地上に立地し、绳文時代と平安時代の豊穴住居などが発見されている。弥生時代の遺構は発見されていないが、遺構外から粘板岩製の磨製石包丁1点が出土している（第23図7）。円孔は本来2箇所に穿たれていたようであるが、1箇所は欠損している。刃部には整形時における横方向の擦痕がみられ、光沢を残す部分もある。

甲府市塙部遺跡

塙部遺跡は、甲府市のはば中央部を南流する相川によって形成された扇状地の扇端部に位置する。県立高校校舎建築や道路整備事業に伴って、これまでの4次にわたる発掘調査が実施されている。弥生時代後期から古墳時代の豊穴住居、方形周溝墓、溝など多くの遺構が発見されている。また、県立中央病院敷地内に広がる富士見一丁目遺跡からは、弥生時代末から古墳時代初頭の小区画水田跡が見つかっており、集落、墓域、生産域がセットで確認された稀有な例として注目されている。弥生時代後期に属する第4次調査2号住居より、粘板岩製の磨製石包丁が出土している²²。石包丁は刃部を直線的に作り、断面は一見両刃のようであるが、片面のみに鏽をもつ片刃に仕上げている。肩部から両側面にかけても、丁寧に研磨して整形を施しており、弧状とはならず直線的となり、長楕円形のプロポーションを呈している。肩部中央には、両側面から整形した円孔が1箇所穿たれており、抉りなどは認められない。

以上のように、本遺跡出土の資料も含め、8遺跡11例を挙げることができた。11例のうち打製石包丁は全



第23図 山梨県内出土の石包丁

の尾遺跡の2例のみで、その他はすべて磨製石包丁である。遺構外の出土例もあることから、すべての帰属時期を明らかにすることはできないが、明らかなものはすべて、弥生時代後期の所産である。

それでは、山梨県内における古墳時代の例はどうであろうか。

並崎市坂井南遺跡は、これまで7次にわたる発掘調査において、古墳時代前期の堅穴住居9軒、方形周溝墓12基などが発見され、当該期の大規模な集落遺跡であることが明らかとなっている。そのうち、2軒の堅穴住居から石包丁が出土している。第1次調査7号住居からは、磨製石包丁が出土している（第23図8）。刃部および背は直線的に作られており、台形を呈している。背の中央付近に両側から整形した円孔を1箇所もつ。第4次調査7号住居からも玄武岩製の磨製石包丁が出土している（第23図9）。刃部は研ぎ減りのためかやや内凹しており、背も弧状を呈する。背の中央付近には両端から整形した円孔を1箇所もつ。円孔の溝には穿孔途中的痕跡が認められるが、隣接することから2孔を意識したものではないと考える。

また、曾根丘陵東山地域の台地先端部に位置する中道町東山北遺跡2号方形周溝墓周溝内より石包丁3点が出土している（第23図10～12）。2号方形周溝墓は、古墳時代前後に造営された、東西24.5m、南北20.6m、周溝幅4.6～6.2mの大型の方形周溝墓である。周溝内からはS字状口縁台付壺や北陸系土器をはじめとした土師器や銅鏡、銅環、鏡先、鉄鎌、土製勾玉・管長・紡錘車・匙、磨製石包丁・石鏡、馬齒などが出土している。S字状口縁台付壺は、対辺間で接合関係にある。また、北辺には鏡先が2点、南辺には高坏が2点、鏡先以外の銅・鉄製品は東辺から出土しており、出土状況に偏りがある。このように、溝中の遺物がセツト状態のものや、類似した遺物が纏まっていることなどから、主体部の遺物が転落したと考えるより、溝中へ遺物を意識的に廃棄したと考えられるような状況にあるといえる。石包丁はいずれも磨製であるが、刃部を直線的に仕上げるものと、やや弧状となるものがある。また、肩部も直線的となるものと、弧状を呈するものがある。いずれも、孔は穿たれておらず、両端にも抉りはみられない。3点のうち、1点には漆状の炭化物とみられる付着物がみられた。これについて調査者は、漆を接着剤として柄を装着した可能性を指摘している。

保坂廉夫によると、山梨県内の例から、砥石なども含めた石製品は後期に本格的にみられるようになるといい、同様に磨製石包丁も後期になって出現するという（保坂2003b）。

一般的に、磨製石包丁は1箇所ないし2箇所の円孔があり、紐を通して指をかける例が多い。一方、打製石包丁の場合は両端に作られた抉りに紐をかけて用いるのを通例とする。例を挙げた8遺跡11例のうち、磨製石包丁は9例ある。円孔が穿たれているのは、堂の前遺跡例、屋敷添遺跡例、塩部遺跡例の3例であり、両端に抉りをもつものが、下横屋遺跡例、嫗ノ内遺跡3例の計4例となり、ほぼ同数となる。

古墳時代の例では、両端に抉りを持つような例はないことから、両端に抉りをもつものから、円孔を持つものへ変化していくことは想定できるが、ここに挙げた例を時間差によるものとして理解することが可能かどうかは、類例が少ないため今後の検討課題としておきたい。

また、今回免見された磨製石包丁3点については、使用痕分析を行っている。その結果については、次章に報告されているのでそちらを参考願いたいが、使用方法の一端を明らかにすることが出来た。

両端に抉りをもつ石包丁の類例は、長野県の南信・飯田地域、東信・小諸佐久地域にもある。長野県南部の飯山、下伊那地域においては、磨製石包丁は打製石包丁に対して客体である。磨製石包丁には、「孔がなく両端に抉入部をもち、刃部を中心に研磨されたものと、単孔を有し、ほぼ全面が研磨されたもの」（御童島1991）があり、前者を「抉入磨製石包丁」「有孔磨製石包丁」としている。山梨県内の例は、南信の例に類似するが、その使用方法には違いがみられるという分析結果になった。

すなわち、南信の例では刃部以外にも使用痕が顕著に認められるのに対し、本遺跡例では刃部以外に使用痕が認められず、抉りにも顕著な消耗がみられないという。これは、石包丁の使用に際し、抉りに掛けられた紐に負担がかからなかった事が考えられ、石包丁に何らかの素材の綴りが装着されていたことを想定させる結果となった。ただし、本遺跡例が普遍的なものなのか、特殊例なのかは、明らかではない。

石包丁の形態や使用方法を復元することは、山梨県内の弥生時代の文化的流入経路ならびに文化圏を探るうえで、重要な意味をもつものであるが、これについては今後の類例の増加と、使用痕分析例の増加によって解明される問題だと考える。

註

- (1) この石包丁については、報告段階では磨製石製品として報告されている。本製品が磨製石包丁であるとの指摘は、山梨県埋蔵文化財センター保坂康夫氏の御教示による。なお、本資料の実見にあたっては、南アルプス市教育委員会保阪太一氏の配慮をいただいた。
- (2) 甲府市教育委員会佐々木満氏のご教示による。

参考文献

- 大島正之 1999 「石の道具」(3)「弥生時代」「山梨県史」資料編2 原始・古代2 山梨県
檍形町教育委員会 1985『六科丘遺跡』 檍形町文化財調査報告 No.3
- 甲府市教育委員会 2004『塙部遺跡I』 甲府市文化財調査報告24
- 酒井龍一 1985「磨製石包丁」「弥生文化の研究」5 道具と技術 I 雄山閣
- 中山誠二 1999「弥生時代の編年」「山梨県史」資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物) 山梨県
蘿崎市教育委員会ほか 1988『板井南』
- 蘿崎市教育委員会ほか 1987『中本山遺跡・堂の前遺跡』
- 蘿崎市教育委員会ほか 1991『下横屋遺跡』
- 蘿崎市教育委員会ほか 1997『板井南遺跡III』
- 保坂康夫 2003a「弥生時代の巨大石鉋」「市史編さんだより」第10号 山梨市役所企画課
- 保坂康夫 2003b「山梨県内の弥生石器の再検討」「弥生石器の再検討－器種・製作技術・石材」 中部弥生時代研究会
- 真壁忠彦 1985「打製石包丁」「弥生文化の研究」5 道具と技術 I 雄山閣
- 御室島正 1989「[抉入打製石包丁]」の使用法－南信州弥生時代における打製石器の機能－」「古代文化」41-8 古代文化研究会
- 御室島正 1991「磨製石包丁の使用痕分析－南信州弥生時代における磨製石器の機能－」「古代文化」43-11 古代文化研究会
- 三澤達也 1997「牧洞寺古墳」「山梨考古」第65号 山梨県考古学協会
- 宮澤公雄 1999「古墳時代の山梨市」「市史編さんだより」第2号 山梨市役所企画課
- 山梨県明野村教育委員会ほか 1993『屋敷添』 明野村文化財調査報告 7
- 山梨県教育委員会 1987「金の尾遺跡・無名墳(きつね塚)」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第25集
- 山梨県教育委員会 1993『平野遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第78集
- 山梨県教育委員会 1993『東山北遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第79集
- 山梨県教育委員会 1996『塙部遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第123集
- 山梨県教育委員会 2000『富士見一丁目遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第167集
- 山梨県教育委員会 2004『中沢遺跡・武家遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第214集
- 山梨市教育委員会 1997「牧洞寺古墳」「山梨市市内遺跡発掘調査報告 1993~1996」 山梨市文化財調査報告書 第5集
- 山梨市教育委員会 2002『山梨市遺跡分布図』

第5章 科学分析

第1節 堀ノ内遺跡出土・石包丁の使用痕分析

考古学研究所（株）アルカ
使用痕研究センター 池 谷 勝 典

はじめに

本遺跡から抉入石包丁が3点出土している。それらの使用痕分析を行うことにより、石包丁がどのような対象物にどのように使用されたのか、堀ノ内遺跡の石包丁に埋め込まれている作法の文化的背景を明らかにするのが目的である。

分析方法

使用的機器は、キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ（VHX-100）による低倍率ズーム（VH-Z05）と高倍率ズームレンズ（VH-Z450）を用いて低倍率と高倍率の使用痕光沢の観察をおこなった。観察倍率は、5倍～40倍と450倍～1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は東北大学の分類基準によっている（梶原・阿子島1981、阿子島1980）。

観察時には、適宜使用痕のデジタル写真を撮影した。

分析資料について

第28図20資料（図版11・12）

石材はホルンフェルスである。素材は、背面に自然面をもつ横長剥片を用いている。剥片の両側面には抉り部を作出し、抉り内部の縁辺を研磨している（図版11・写真1）。背縁部は、凸部を研磨して滑らかになるように調整している。刃部は、背面側の縁辺から3～5 mm幅を入念に研磨している。腹面側は刃縁から1～2 mm程度の幅で研磨がなされるのみである。刃部の断面形はやや片刃状になり、刃角は54～60度である。刃部の研磨痕は横方向に明瞭に観察される（図版11・写真2）。

刃部の使用痕については、刃部の下見に低倍率でも観察できる刃縁に直交かやや右に斜行する線状痕が観察される。高倍率の観察では、裏面側の刃縁に近い部分にBタイプの使用痕光沢が観察される（図版12・写真9～11、13～15）。高倍率の観察においても使用痕光沢とともに約10ミクロン幅の線状痕が明瞭に観察される。一方、正面側には裏面側のような明瞭なBタイプの使用痕光沢は観察されずに微弱な不明光沢が観察されるのみである（図版11・写真4～7）。背縁についても使用痕光沢は観察されない（図版12・写真12）。抉り部分についても使用痕光沢は観察されないが、抉り内部の縁辺については、観察できずに不明である。

以上の観察結果から、対象物はBタイプの使用痕光沢との相関が強いイネ科植物であると推定される。使用法については、裏面側が対象物とよく接触し、刃縁に対して直交か斜行するように接触する使用法が考えられる。いわゆる、刈り取りではなく摘み取りの動作が推定される。石器の持ち方は、裏面側を天（作業者と向き合うように）にして手の中に保持していたと推定される。さらに、線状痕の方向が右方向に斜行することを考えると左手で保持しながら使用されたと推定される。

また、抉り部の摩耗がほとんど見られない点から抉りに取り付けられたモノと石器はあまりすれ合うことがなくよく固定されていたと推定される。抉り部分の摩耗が顕著ではなく、背縁、刃部以外に光沢がみられないことから刃部以外の部分が何らかのもので覆われていた可能性がある。

第28図21資料（図版13・14）

石材はホルンフェルスである。素材は、背面に自然をもつ剥片であるが、主要剥離面側は筋理で剥離して

いる。剥片の両側には抉り部を作出し、抉り内部・稜線部分をわずかに研磨している。背縁部は凸部を剥離で調整している。刃部は、背面側の縁辺から2~4mm幅で研磨している。腹面側は刃縁から3~5mm幅で入念に研磨されている。刃部の断面形はやや片刃状になり、刃角は56~62度である。刃部の研磨痕は横方向に明瞭に観察される。

刃部の使用痕については、刃部の下見に低倍率でも観察できる刃縁に直交かやや右に斜行する線状痕が観察される。高倍率の観察では、正面側の刃縁に近い部分にBタイプの使用痕光沢が観察される(図版13・写真5~8)。一方、裏面側には正面側のような明瞭なBタイプの使用痕光沢はほとんど観察されず不明光沢が観察されるのみである(図版14・写真9~13)。抉り部分や刃部以外の部分についても光沢は観察されない。

以上の観察結果から、対象物はBタイプの使用痕光沢との相関が強いイネ科植物であると推定される。使用法については、正面側が対象物とよく接触し、刃縁に対して直交か斜行するように接触する使用法が考えられる。いわゆる、刈り取りではなく摘み取りの動作が推定される。石器の持ち方は、正面側を天(作業者と向き合うように)にして手の中に保持していたと推定される。石器の使用法、保持の仕方は、第28図20とほとんど同じであると考えられる。

第28図22資料(図版15)

石材は片岩である。全体的に風化が激しく、刃部の破損が顕著である。素材は節理で剥離した剥片である。剥片の両側には抉り部を作出し、抉り内部・稜線部を入念に研磨している(図版15・写真2)。抉り部加工においては、3点の中で一番丁寧に作られている。背縁部はわずかに研磨をして滑らかに整えている。刃部は、破損が激しいが残存部の計測では、正面側の縁辺から約5mm幅で研磨している(図版15・写真1)。裏面側は刃縁から約2mm幅で研磨されている。刃部の断面形はやや片刃状になり、刃角は45~50度である。

高倍率の観察では、使用痕光沢は観察されない。表面風化の影響が強いことと、刃部の破損が大きいために使用痕光沢が観察されないと考えられる。抉り部には、顕著な摩耗は見られない。

まとめ

3点の石包丁の使用痕分析により、以下の点が明らかとなった。

作り方の特徴

- ・剥片を素材とする。残存している自然面から河原の楕円礫を素材としている。
- ・両側に抉りを作出し、抉り内部を研磨する。
- ・刃部は、やや片刃状になるように研磨する。表裏面で研磨の程度を違えている。
- ・背の部分も凸部などがあれば研磨などで整え滑らかにする。
- ・平面形が長方形ではなく、左右どちらかの刃が短くなり背部が弧状になるように成形されている。
- ・資料数が少ないが石器の長さ、幅、厚さがほぼ統一されている。長さは36mm前後、幅は80mm前後、厚みは8mm前後で±3mmに納まる大きさであると推定される。

使い方の特徴

- ・表裏どちらかの面に使用痕分布が偏り、片刃状に鏽部が作られている側と反対側の刃部に使用痕光沢が強く見られる。
- ・使用痕光沢はBタイプが観察される。
- ・線状痕は、刃部にたいして直交か斜行する。
- ・刃部以外の部分には使用痕光沢は観察されない。
- ・抉り部には顕著な摩耗がみられない。

以上の観察結果から、本遺跡の石包丁の使用法を復元すると石包丁に何らかの素材で作られた抉り部が装着され、両側の抉り部に紐をかけて固定されている。それを鏽が作られている刃部とは反対側の刃部を作業者と向き合うように保持し、手首を内側に返しながらイネ科植物を摘みとるという使用法が考えられる(図版16)。

この点から資料第28図20と同21を比べると、実測図では平面形は同じ置き方をしているにもかかわらず、

刃部（鑄）の付けられる面が違っているのがわかる。使用痕の分布パターンは、鑄部と反対面によく使用痕が分布し、その分布が左右どちらかにかたよる点、線状痕がやや右方向に斜向する点は同じである。このような現象が生じたのは、20・21ともに左手に保持されて使用され、使用者は、形態の特徴を無視して使用していた可能性がある。これは、製作者と使用者が異なる可能性もあり、興味深い。

今回の分析では、わずかに3点であったが今後おなじ石器を見ていく上のポイントとなる部分を提示することができたと考える。分析資料を増やしていくことで山梨地域における抉入磨製石包丁の製作方法と使用法をより具体的に復元していくことが可能である。また、長野県の南信・飯田地域、東信・小諸佐久地域にも同じような石包丁が確認されており、それらの地域との関連も解明していくかなければならない。飯田地域については、御堂島氏が同種の石包丁の使用痕分析をおこなっており、その使用法を復元しているが（1989・91）、今回の分析と食い違う点がある。それは、恒川遺跡や殿原遺跡の分析例では、刃部以外の部分にも使用痕光沢が見られる点である。この違いは抉り部の機能とも関連し、石器の保持の仕方や組掛けの方法等の違いを示している可能性が考えられる。山梨県内での分析例が増えていけば、地域性が明らかになっていくかもしれない。また、徳島県、高知県などでも同じような抉り部をもつ打製、磨製石包丁が確認されており、それらとの関連も今後追求していくかなければならない。

このように使用痕分析を行っていくことで、より具体的に石器の使用法などを復元していくデータが得られ、その積み重ねによって、山梨県内に弥生文化がどのように入ってきたのか、堀ノ内遺跡の弥生文化がどのような系譜をもつのかという点についても復元していくことができると考えている。今後さらなる分析事例の増加を期待したい。

参考文献

- 阿子島香 1989『石器の使用痕』ニューサイエンス社
梶原洋・阿子島香 1981「頁岩製石器の実験使用痕研究-ボリッシュを中心とした機能推定の試み-」『考古学雑誌』67(1): 1-36
小林正春・山下誠・桜井弘人他 1986『恒川遺跡群』飯田市教育委員会
塙入秀敏・塙山雄二・古平浩之 2002『八名の上遺跡』東部町教育委員会
芹沢長介・梶原洋・阿子島香 1982「実験使用痕研究とその可能性（東北大大学使用痕研究チームによる研究報告 その4）」「考古学と自然科学」14: 67-87
御堂島正 1991「磨製石包丁」の使用痕分析-南信州弥生時代における磨製石器の機能-『古代文化』11-43: 26-35
御堂島正 1989「[抉入打製石包丁]の使用法-南信州弥生時代における打製石器の機能-」『古代文化』8-41: 1-15
Keeley, L. H. 1980 *Experimental Determination of Stone Tool Uses: A Microwear Analysis.* University of Chicago Press, Chicago and London.

おわりに

今回の堀ノ内遺跡の発掘調査においては、調査面積も狭小でありわずか1ヶ月ほどの調査期間であったが、多くの成果を上げることができた。

山梨市内における弥生時代の遺跡は、延命寺遺跡、高畠遺跡など本遺跡を含め7遺跡が確認されている。しかし、発掘調査などはほとんど行われておらず、市内の弥生時代の様相はほとんど明らかとなっていない。弥生時代の堅穴住居の発見も初めての例となった。

わずか1軒だけではあるが発見された弥生時代後期の堅穴住居は、焼失家屋ということもあり遺構・遺物の残存状況は良好で、豊富な遺物が出土している。これまで、弥生時代の遺跡の調査例がほとんどなく、当該期研究の空白地帯であった甲府盆地北東部地域において、土器組成などを明らかにすることが出来た。

出土した遺物のうち、石包丁3点が出土したことは特筆される。山梨県内における弥生時代の石包丁の出土例は少なく、本遺跡例を含め8遺跡11例ほどを数えるにすぎない。

また、石包丁の使用痕分析を行ったのは初めてのことであり、今後の石包丁の使用復元において、貴重な資料を提示することが出来たと思っている。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に向け、ご協力いただいた機関・各位、作業に従事された方々にお礼申し上げます。

第1表 土坑・ピット一覧表

[] の中の数値は復元値
単位: m

遺構名	グリッド	形態	上部 長径×短径	下部 長径×短径	半幅	深さ	出土遺物			備考
							遺物	器	石器	
1号土坑	11-27	不整精円	1.66×[1.10]	1.38×[0.94]	0.13	N-36-E	先住上器4点、黒曜石1点	1・2号墓に切られる		
2号土坑	11-15	不整精円	0.82×0.71	0.66×0.54	0.11	N-1-E				
3号土坑	9-24	精円	1.56×0.80	1.31×0.56	0.16	N-29-E	縄文土器2点			
4号土坑	11-22	不整	1.50×1.50	1.33×1.40	0.17	N-68-E	縄文土器4点	5・6号土坑に切られる		
5号土坑	11-21	不整	0.88×0.83	0.77×0.66	0.09	N-90-E		4号土坑を切る		
6号土坑	12-22	不整	0.80×0.68	0.70×0.50	0.09	N-30-E	縄文土器1点、黒曜石1点	4号土坑を切る		
7号土坑	8-25	精円	1.06×0.71	0.85×0.48	0.15	N-63-R	先住土器5点、縄文土器1点			
8号土坑	13-38	精円	1.06×0.82	0.87×0.62	0.21	N-8-W	先住土器1点			
9号土坑	14-39	精円	0.68×0.51	0.55×0.36	0.25	N-2-E	縄文土器2点			
10号土坑	8-36	隅丸方	1.58×1.20	1.36×0.96	0.16	N-31-E	先住土器4点、縄文土器2点			
11号土坑	7-36	精円	0.73×0.53	0.59×0.29	0.14	N-68-W	先住土器1点			
12号土坑	8-37	不整円	0.67×0.63	0.44×0.41	0.14	N-73-W				
13号土坑	7-38	不整精円	0.65×0.51	[0.58]×0.28	0.16	N-40-W	縄文土器1点			
14号土坑	8-44	精円	0.72×0.55	0.48×0.38	0.18	N-38-W				
15号土坑	7-44	不整精円	0.77×0.67	0.40×0.38	0.25	K-46-E	先住土器4点			
16号土坑	15-33	方	[0.23]×0.43	[0.23]×0.32	0.06	N-39-W				
17号土坑	15-33	円	0.42×0.37	0.31×0.25	0.10	N-26-W				
18号土坑	15-41	円	0.50×0.42	0.37×0.29	0.16	N-10-E	縄文土器1点			
19号土坑	15-29	不整	[1.10]×[0.93]	[0.94]×[0.81]	0.25	N-57-E	縄文土器3点			
20号土坑	6-31	円	0.55×0.49	0.42×0.37	0.13	N-61-W				
21号土坑	5-51	不整精円	0.63×0.51	0.41×0.23	0.21	N-89-F				
22号土坑	5-54	精円	1.33×1.02	0.79×0.57	0.36	N-21-W	縄文土器1点			
23号土坑	5-37	隅丸方	-	0.53×0.45	0.21	N-28-E		3号窓を切る		
24号土坑	5-59	不整精円	0.71×0.64	0.55×0.39	0.15	N-36-W	縄文土器1点			
25号土坑	7-58	不整精円	[0.53]×0.54	[0.44]×0.33	0.34	N-20-E	縄文土器2点			
26号土坑	7-58	不整精円	[0.74]×0.59	0.55×0.38	0.41	N-67-E	縄文土器1点			
27号土坑	8-57	円	0.43×0.43	0.28×0.29	0.11	N-82-E	縄文土器1点			
28号土坑	8-59	不整精円	0.82×0.57	0.53×0.25	0.30	N-39-F	縄文土器3点			
29号土坑	8-60	円	0.49×0.41	0.34×0.29	0.13	N-2-E				
30号土坑	9-61	円	0.44×0.40	0.30×0.26	0.13	N-3-W				
31号土坑	7-58	不整精円	0.67×0.45	0.42×0.21	-	N-37-W				
1号ピット	15-32	精円	0.30×-	0.16	0.26	-	縄文土器1点	25・26号土坑と重複		
2号ピット	8-59	円	0.34×0.30	0.21×0.17	0.26	-	先住土器2点	北半廻査区外		

第2表 出土遺物觀察表（土器）

は深くお詫び、（ ）は専門家である。
は専門家で、（ ）がおられたかのうちのものと申します。また、これらの専門家は日本語によるものである。

卷之三

第3表 出土遺物観察表(土製品)

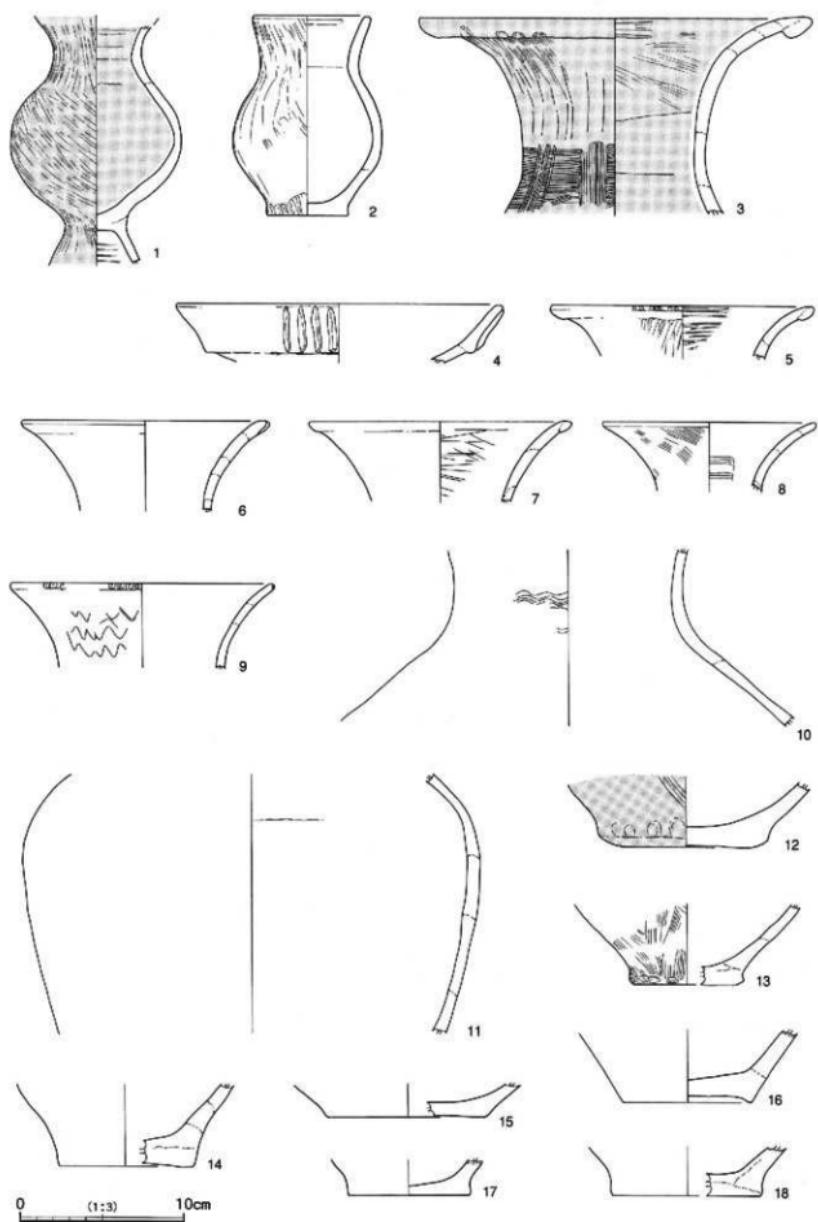
1. 距離「」は復元実測値。()は原件値。

2. 備考欄は、図示されたうちのもの／縮体全体のうちのものを示す。また、これらの実物は目前によるものである。

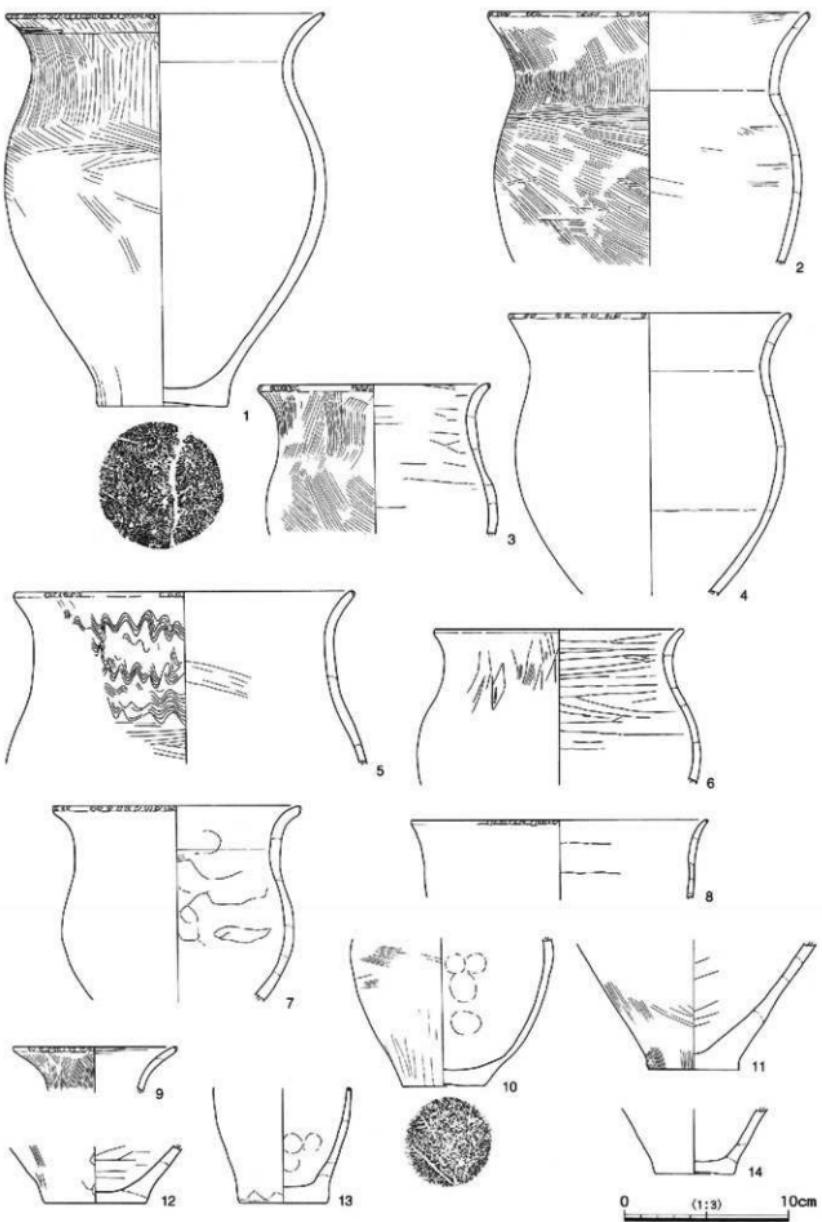
遺構名	図版	種別	法 量 (cm・g)				形 指 法		色 調		胎 土		残存率	備 考
			口径・底・高	長・短・厚	重量	外面	内部	底部	にぶい黒褐色	(10YR5/3)	白・黒色粒子・小石、鐵性質	50/50		
1号住居	28-15	効延亞		(6.3) - - 1.2	25	-	-	-	にぶい黒褐色	(10YR5/3)	白・黒色粒子・小石、鐵性質	50/50		
1号住居	28-16	効延亞		[6.0] - - 1.2	22	-	-	-	にぶい黒褐色	(7.5YR5/4)	白・黒色粒子・金色雲母、小石	40/40		
1号住居	28-17	手型		- - 3.2 - (1.7)	15	指ナデ指ナデ正直			にぶい青褐色	(10YR6/4)	白・赤・黒色粒子・金色雲母	70/-		
1号住居	28-18	手握		2.4 - (2.0) 2.3	8	ナデナデナデ			にぶい黄褐色～黒	(10YR7/3 - ~10YR2/1)	白・赤・黒色粒子・金色雲母	80/80	焼きむらあり	
クリット	28-19	土製円盤		4.0 + 3.6 + 1.05	20	ナデ	不明	-	明褐色	(7.5YR5/6)	白・黒色粒子・金色雲母	100		

第4表 出土遺物観察表(石器)

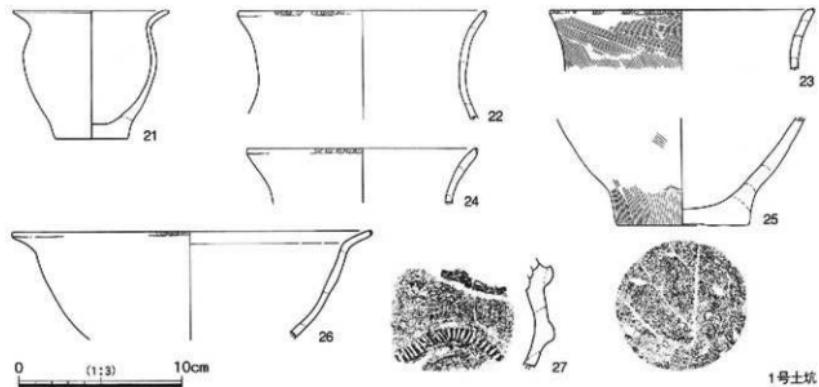
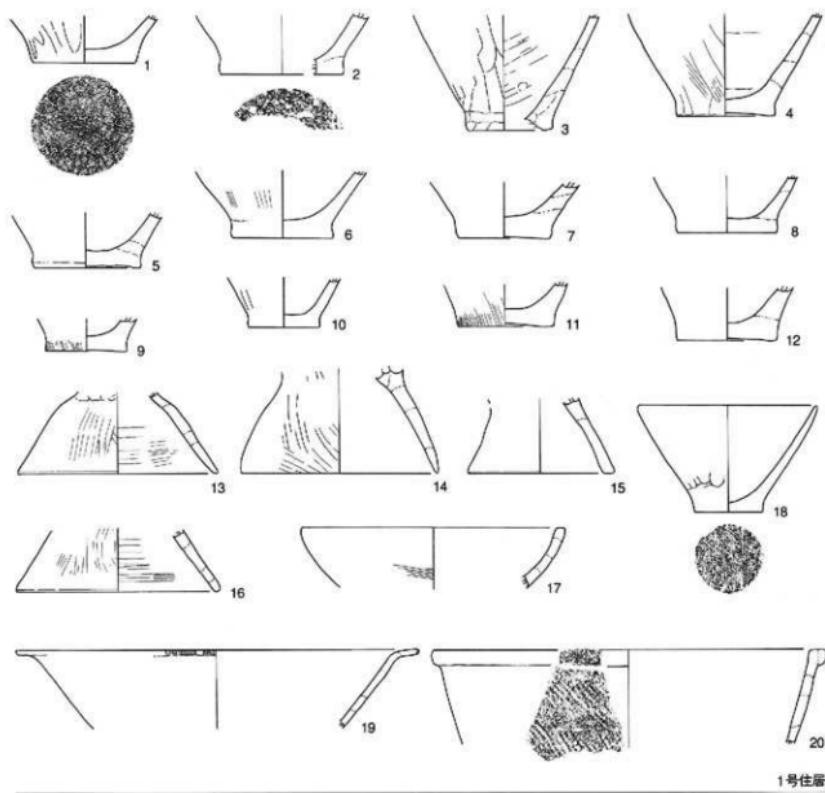
遺構名	図版番号	器種	石材	残存度	刃部属性	形態	素材形態	打面	素材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	
1号住居	28-20	抉入石包丁	ホルンフェルス	完形	針磨	ID+研磨	HD	機長剥片	不明	34.9	75.5	8	27.5	使用痕分析	
1号住居	28-21	抉入石包丁	ホルンフェルス	完形	研磨	ID	HD	機長剥片	不明	35.7	79.4	7.6	24.7	使用痕分析	
1号住居	28-22	抉入石包丁	片岩	刃部欠	研磨	ID+研磨	HD	剥片	不明	36.9	76.2	7.4	22.8	使用痕分析	
1号住居	29-1	打製石斧	ホルンフェルス	完形	HD	HD	ID	機長剥片	不明	201.8	87.4	34.5	713.5		
1号住居	29-2	打製石斧	ホルンフェルス	刃部欠	不明	HD	HD	機長剥片	不明	116.8	52.6	16.2	105.8		
1号溝	29-3	打製石斧	ホルンフェルス	刃部欠	不明	HD	HD	機長剥片	不明	98.3	59.9	18.8	114.6		
クリッド	29-4	打製石斧	粘板岩	完形	ID	HD	ID	機長剥片	不明	128.7	50.9	13	88.3		
クリッド	29-5	打製石斧	ホルンフェルス	完形	HD	HD	ID	機長剥片	不明	115.9	58.8	16.4	141.2		
クリッド	29-6	打製石斧	ホルンフェルス	刃部欠	不明	HD	ID	機長剥片	不明	75.7	46.8	14.7	65.9		
クリッド	29-7	二次加工剝片	ホルンフェルス	完形	不明	ID	ID	細長剥片	自然面	HD	82.1	70	24.4	129.9	右辺が緩折丸



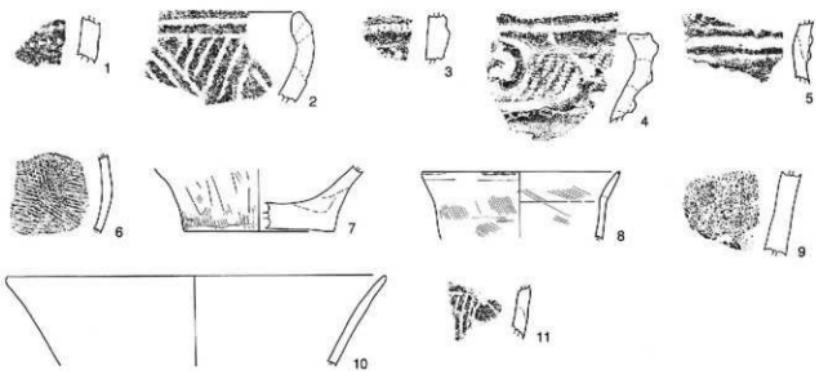
第24図 出土遺物 (1)



第25図 出土遺物 (2)



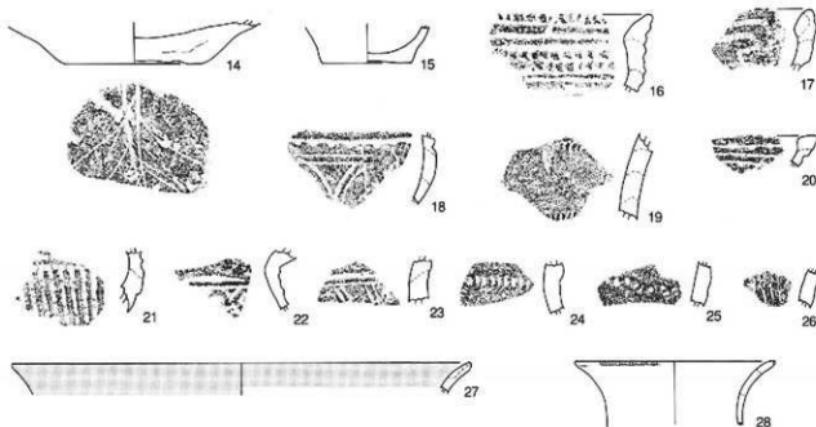
第26図 出土遺物（3）



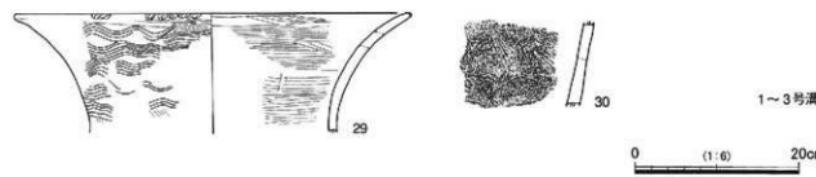
土坑



土坑

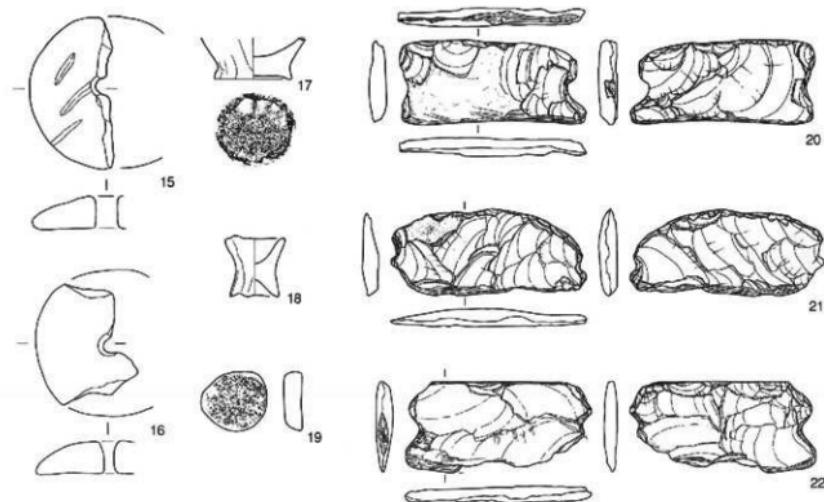
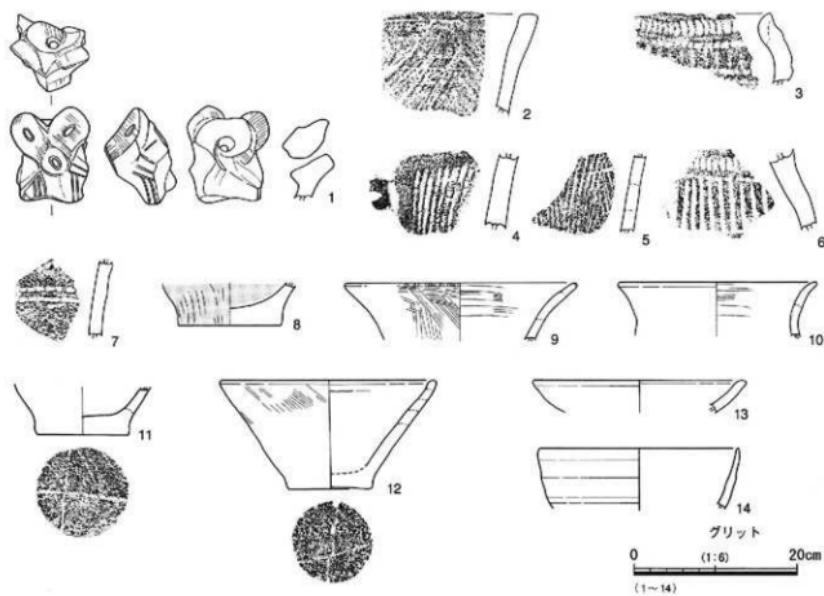


風倒木頭

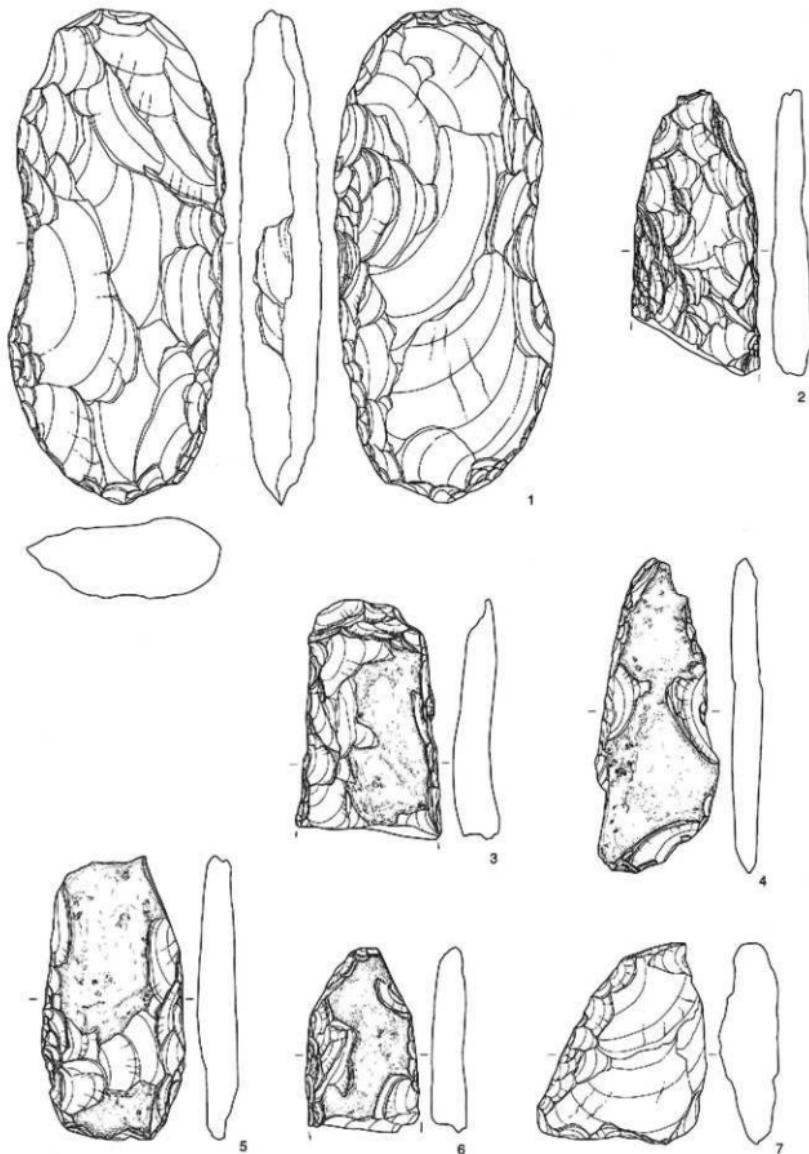


0 (1:6) 20cm

第27図 出土遺物 (4)



第28図 出土遺物 (5)



0 (1:2) 5cm

第29図 出土遺物 (6)



1 航空写真(1)



2 航空写真(2)

図版 2



1 1号穴住居全景



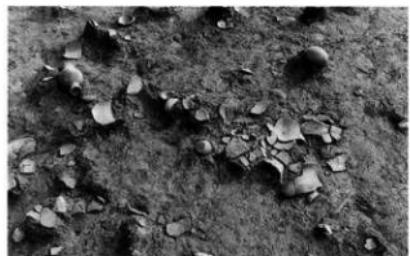
2 同遺物検出状況



3 同遺物出土状況(1)



4 同遺物出土状況(2)



5 同遺物出土状況(3)



6 同遺物出土状況(4)



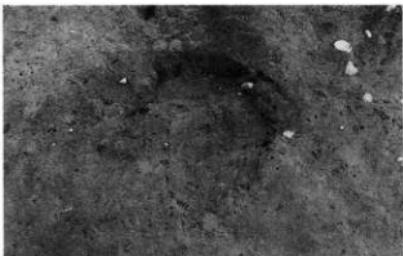
7 同遺物出土状況(5)



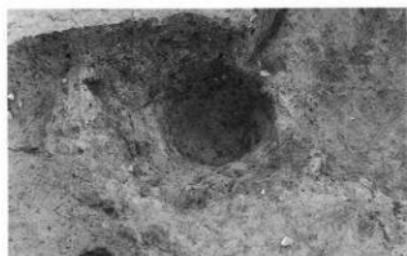
8 同遺物出土状況(6)



1 1号竪穴住居炉



2 同ピット



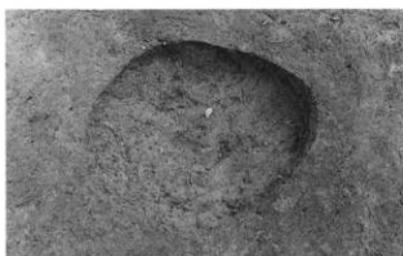
3 同貯蔵穴



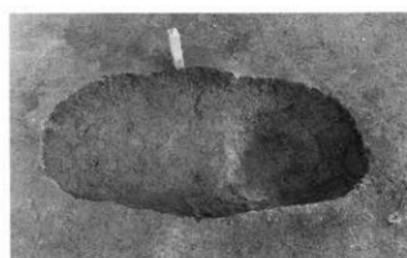
4 1号土坑全景



5 同遺物出土状況



6 2号土坑全景

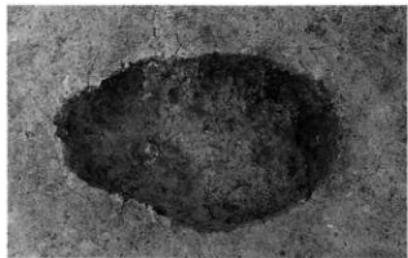


7 3号土坑全景



8 4~6号土坑全景

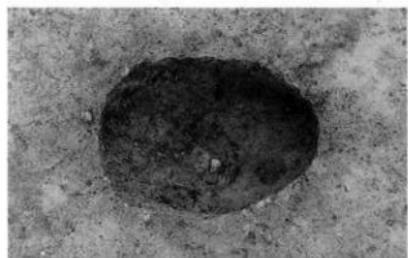
図版 4



1 7号土坑全景



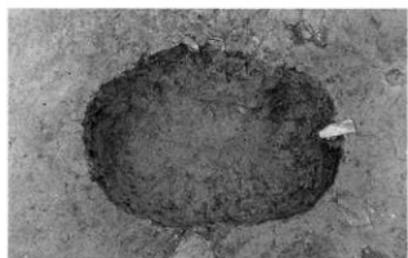
2 8号土坑全景



3 9号土坑全景



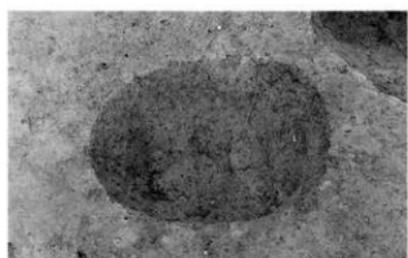
4 10号土坑全景



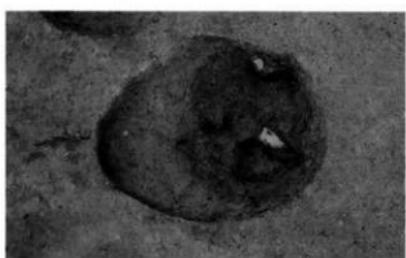
5 11号土坑全景



6 12・13号土坑全景



7 14号土坑全景



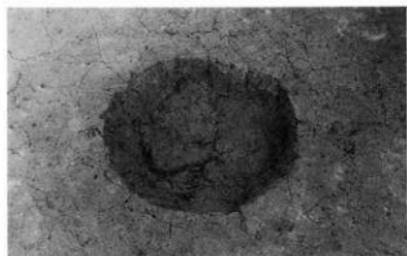
8 15号土坑全景



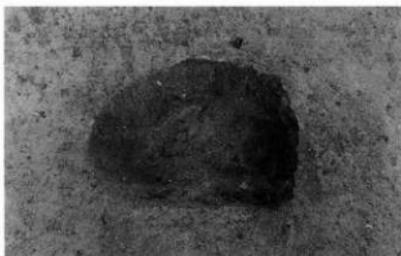
1 16・17号土坑全景



2 19号土坑全景



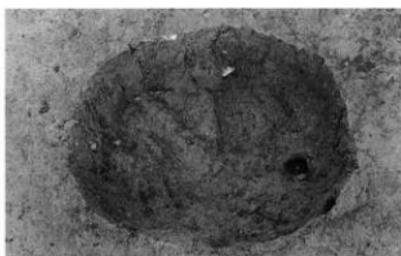
3 20号土坑全景



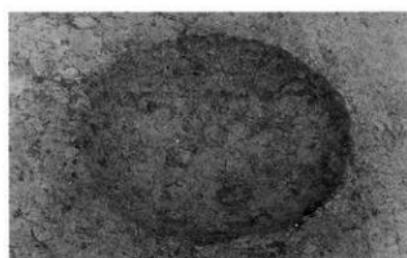
4 21号土坑全景



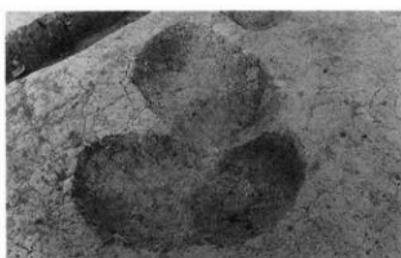
5 22号土坑全景



6 23号土坑全景

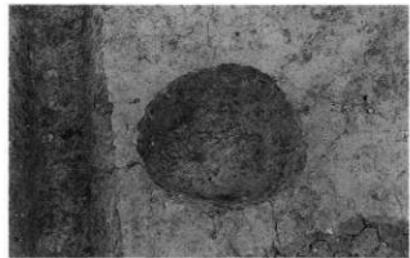


7 24号土坑全景

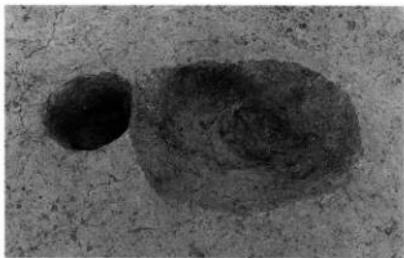


8 25・26・31号土坑全景

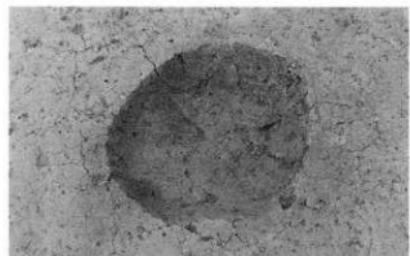
図版 6



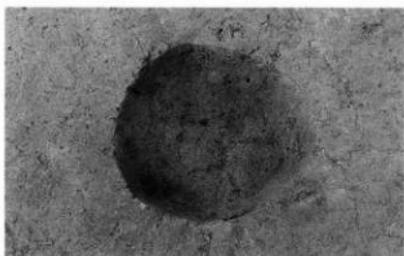
1 27号土坑全景



2 28号土坑・2号ピット全景



3 29号土坑全景



4 30号土坑全景



5 1号ピット全景



6 風倒木痕完掘状況



7 1号溝全景



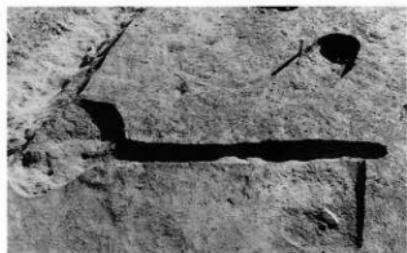
8 同様検出状況(1)



1 同様検出状況(2)



2 同様検出状況(3)



3 2号溝全景



4 3号溝全景



5 調査風景 (1)



6 調査風景(2)

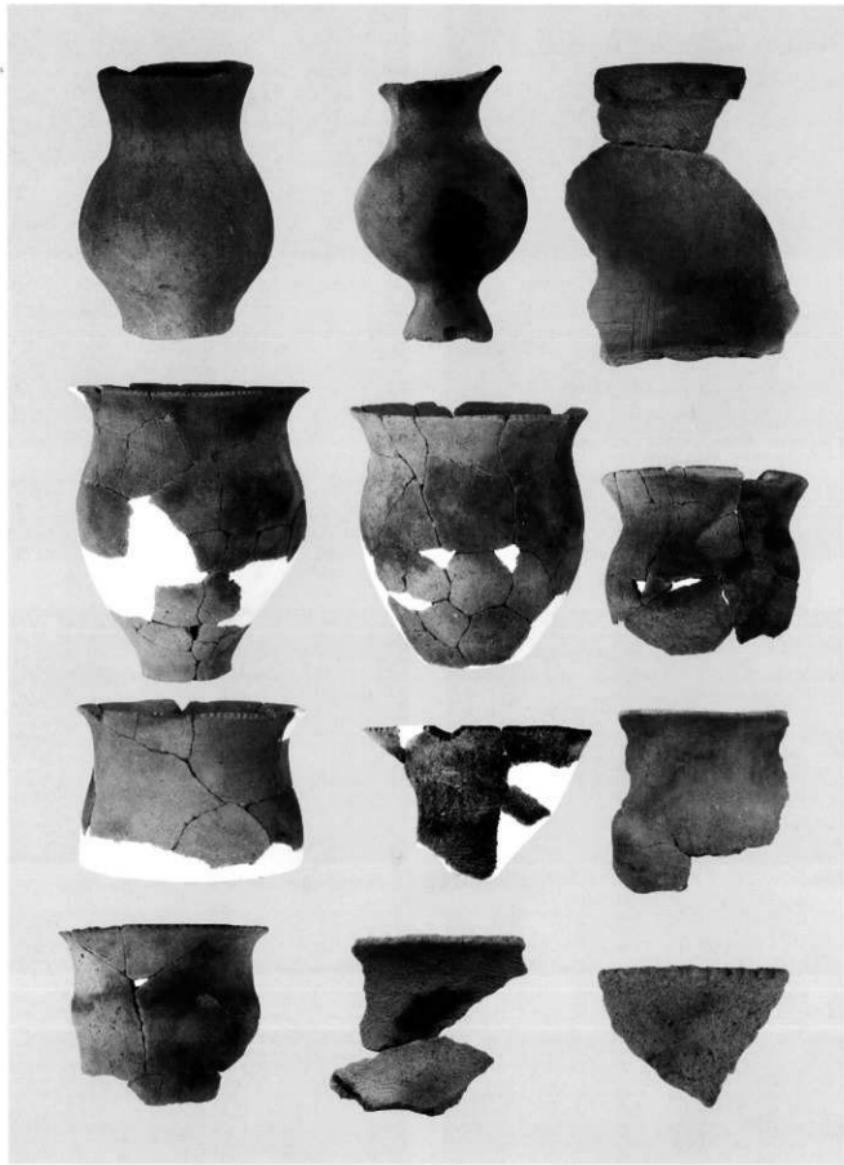


7 調査風景(3)



8 調査風景(4)

図版 8

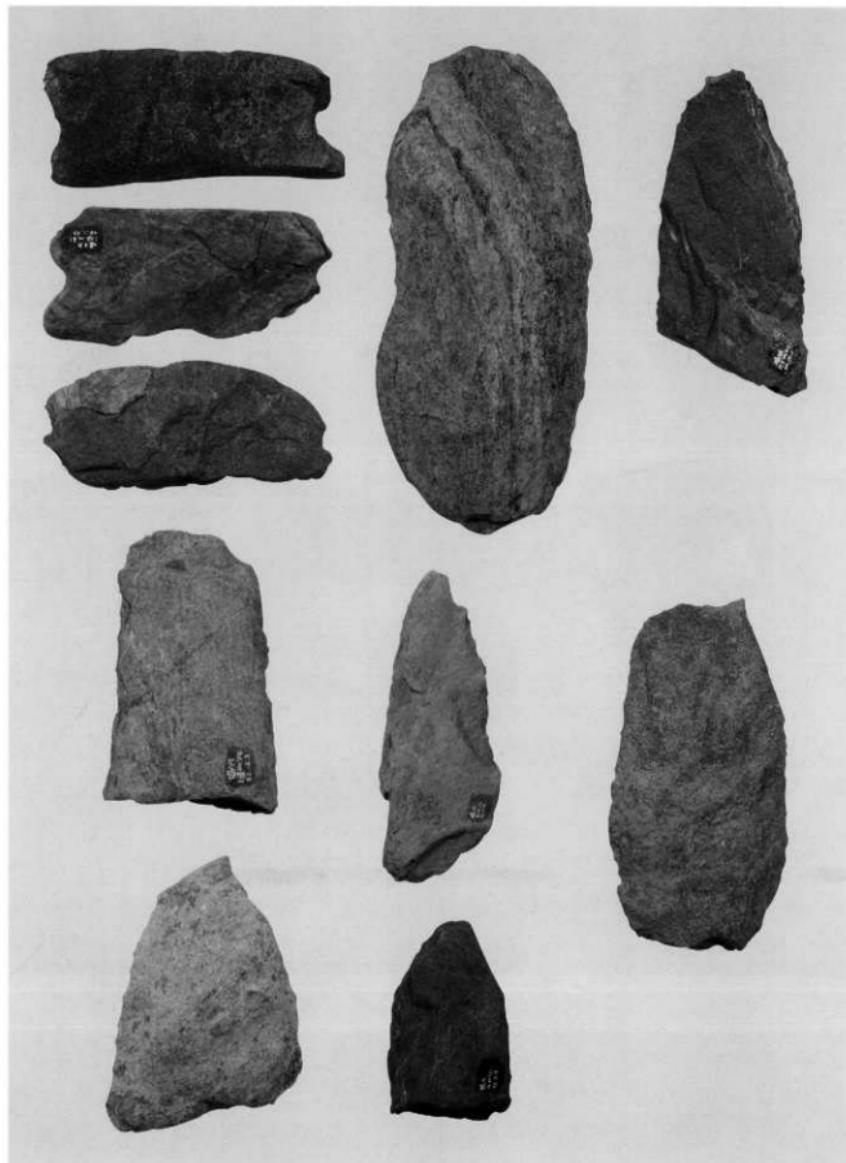


出土遺物(1)

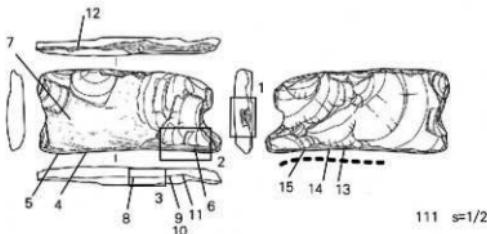


出土遺物(2)

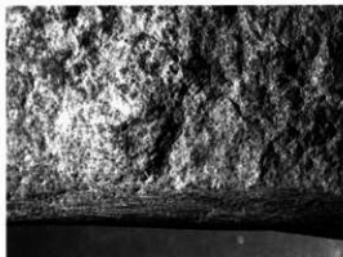
図版10



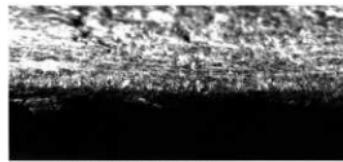
出土遺物(3)



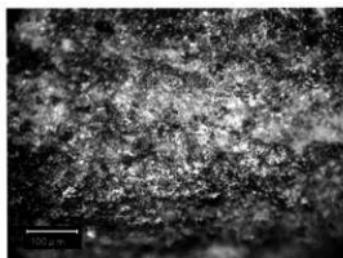
1 右側抉り部



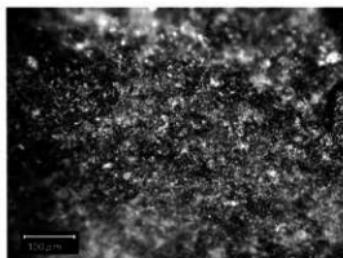
2 正面刃部研磨



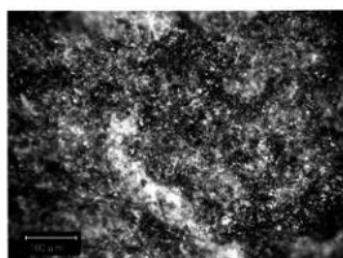
3 刃部下見・直交する線状痕



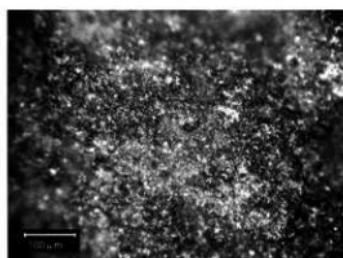
4 Bタイプ



5 不明光沢



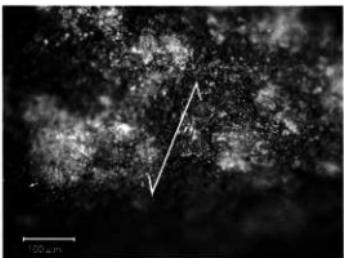
6 Bタイプ (小バッチ)



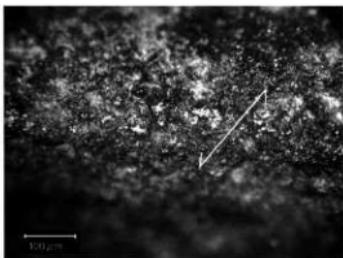
7 不明光沢

石包丁の使用痕 (1-1)

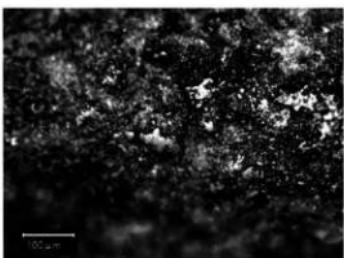
図版12



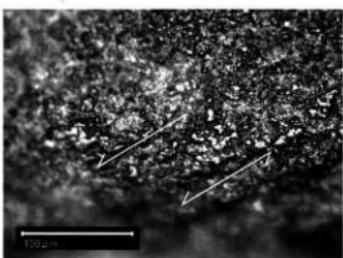
8 刃部下見の線状痕



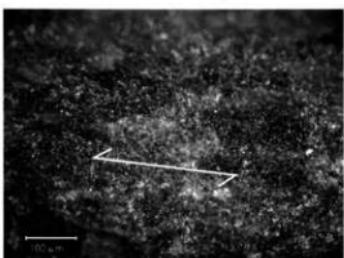
9 Bタイプと線状痕



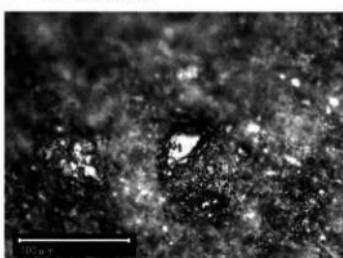
10 2の拡大・Bタイプ



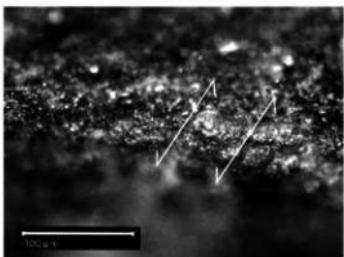
11 Bタイプと線状痕



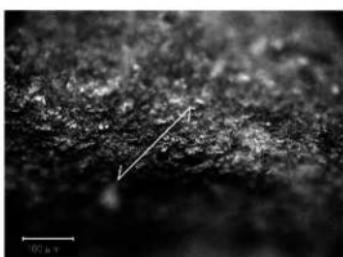
12 背部の研磨痕



13 Bタイプ

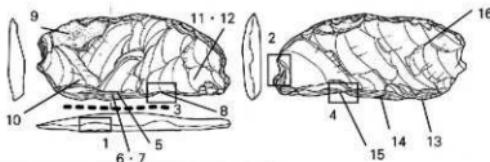


14 Bタイプと線状痕



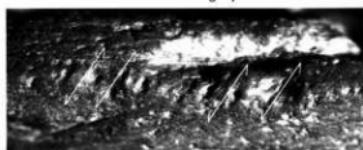
15 Bタイプと線状痕

石包丁の使用痕 (1-2) *矢印と線状痕の位置は、ほぼ重なっている

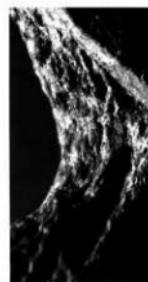


340 s=1/2

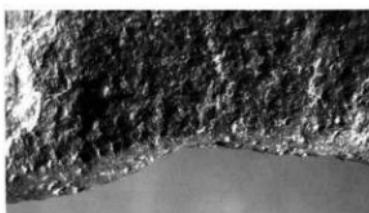
使用痕光沢が強い範囲



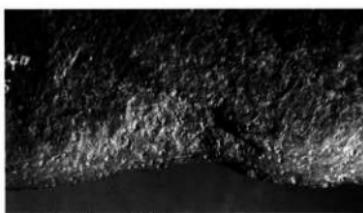
1 刃部下見・直交、斜行する線状痕



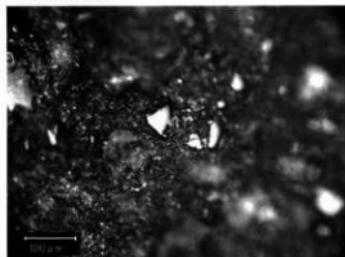
2 右側裏面側挟り部



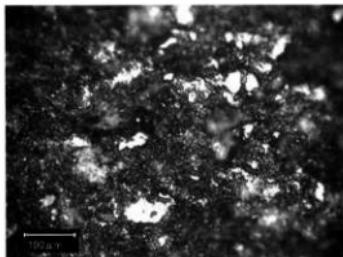
3 正面刃部研磨



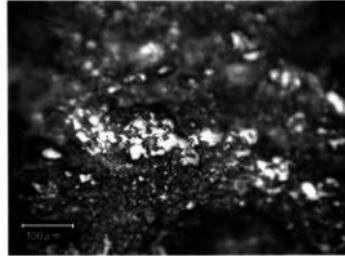
4 裏面刃部刃こぼれ部



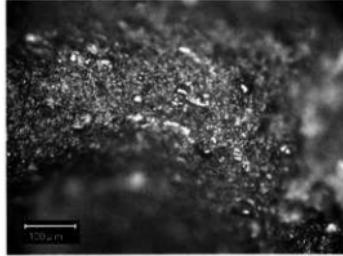
5 Bタイプ



6 Bタイプ

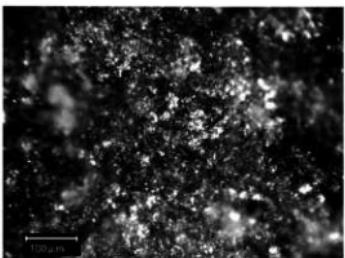


7 Bタイプ

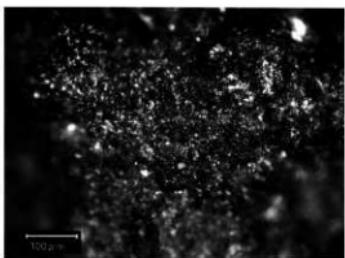


8 剥離線線上にもBタイプ・刃こぼれしてから
使用した結果である

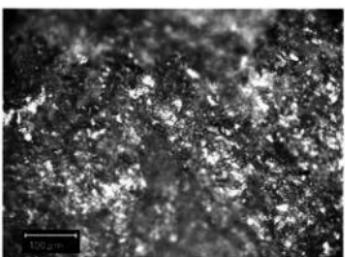
図版14



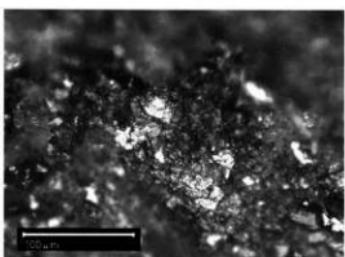
9 不明光沢



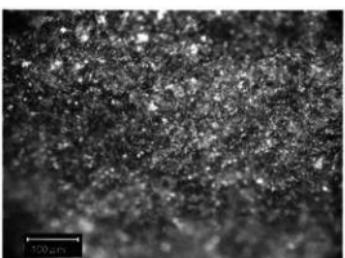
10 微弱光沢、使用痕光沢なし



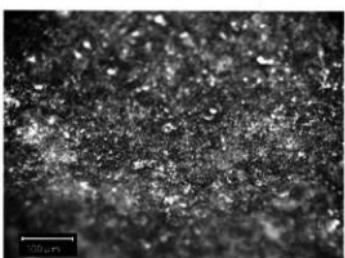
11 不明光沢



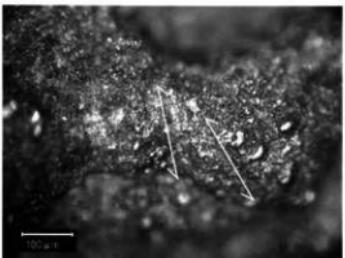
12 11不明光沢の拡大 (鉱物の斑晶)



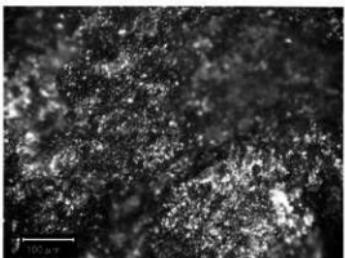
13 使用痕光沢なし



14 Bタイプ (小バッチ)

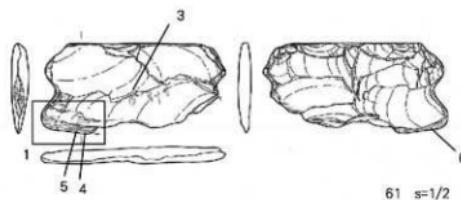


15 Bタイプと線状痕



16 使用痕光沢なし

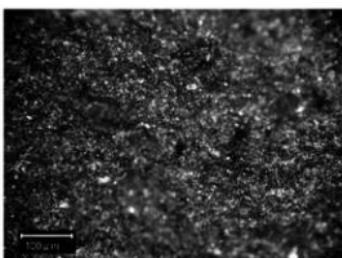
石包丁の使用痕 (2-2)



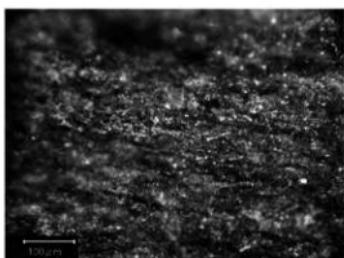
1 正面刃部研磨



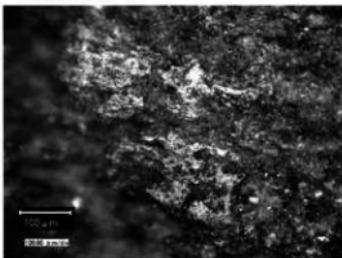
2 左側正面抉り部



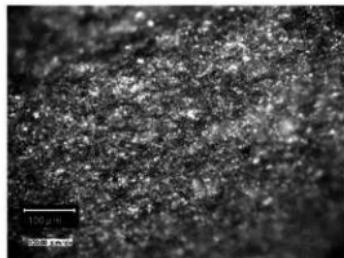
3 使用痕光沢なし



4 使用痕光沢なし



5 不明光沢 (付着鉄分の摩耗と推定)



6 使用痕光沢なし

石包丁の使用痕 (3)

図版16



石包丁の持ち方（左手の場合）



1 親指の腹で軸を押さえる



2 軸をしっかりと押さえて手首を返していく



3 軸を押さえたまま更に手首を返して刃部の稜線に引っかけるようにして摘みとる



石包丁の持ち方と操作方法復元（紐掛けの場合）

堀ノ内遺跡報告書抄録

ふりがな	ほりのうちいせき
書名	堀ノ内遺跡
シリーズ	山梨市文化財調査報告書 第7集
著者名	池谷勝典・宮澤公雄
発行者	山梨市
編集機関	財団法人山梨文化財研究所
住所・電話	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 TEL 055-263-6441
印刷所	株エンドレス
印刷日	2004年12月1日
発行日	2004年12月10日
所在地	山梨県山梨市上石森
地図名	25,000分の1地形図 石和
位置	北緯35度40分25秒、東経138度42分00秒
標高	324.6m
市町村コード	19205
調査原因	市道石森山南線道路改良事業
調査期間	2003年11月11日～2003年12月17日
調査面積	592m ²
主な時代	縄文時代中期・弥生時代後期
遺跡概要	主な遺構 弥生時代後期の堅穴住居1軒、溝3条、土坑31基、ピット2基、風削木 主な遺物 縄文時代中期の土器、弥生時代後期の土器・石器 特殊遺構 特殊遺物 弥生時代の石包丁・石鉗

山梨市文化財調査報告書 第7集

堀ノ内遺跡

2004年12月1日 印刷

2004年12月10日 発行

編 集 財団法人山梨文化財研究所

山梨県笛吹市石和町四日市場1566 TEL 055-263-6441

発 行 山梨市

印 刷 株エンドレス

